

平成 28 年度卒業論文

戦後日本における留学の変容と若者のライフコースに関する考察

北海道教育大学旭川校

教員養成課程 社会科教育専攻 社会学ゼミ

学生番号 2332

遠藤和馬

## 目次

はじめに	1
第 I 部 戦後日本の留学の変容と考察	2
第 1 章 海外留学について	
1-1 留学とは何か	3
1-1-1 留学の起源 -「エミール」ルソーによる教育論-	3
1-2 海外留学の歴史	4
1-2-1 古代から中世～近世の留学	4
1-2-2 近代の留学	5
1-2-2-1 岩倉使節団	6
1-2-2-2 森鷗外と夏目漱石	7
1-2-3 戦後から現在の留学	8
1-3 現代の海外留学の種類と制度	8
1-3-1 目的からみる海外留学	8
1-3-2 海外留学の制度	9
1-3-3 渡航先での滞在方法	11
1-4 現代の海外留学の目的と意義	11
1-4-1 なぜ留学するのか -語学力の向上-	12
1-4-2 なぜ留学するのか -専門的知識の習得-	13
1-4-3 海外留学の意義	13
1-5 「留学の第 3 要素」の確立	14
1-6 小括	14
第 2 章 データで見る日本人の海外留学	
2-1 全体的な日本人留学生数	16
2-2 国（地域）別の日本人留学生数	17
2-2-1 日本人のアメリカ留学	18
2-2-2 増加するアジア留学	20
2-3 地域別・期間別の日本人留学生数	20
2-4 専攻分野別の日本人留学生数	21

2-5	男女別の日本人留学生数	23
2-6	小括	24
第3章 留学の変容を社会的背景から見る		
3-1	序節	25
3-2	少子化との相関	25
3-3	国内環境との相関	26
3-3-1	学生の海外留学を評価しない雇用主	26
3-3-2	就職活動の早期化と長期化	27
3-3-3	インターネットの普及による影響	28
3-4	国内の大学に関する考察	28
3-4-1	大学全入時代への突入	28
3-4-2	単位互換（認定）制度の未整備と学事歴の違い	30
3-4-3	大学での国際交流プログラム開発の遅れ	30
3-5	経済問題に関する考察	31
3-5-1	高騰するアメリカの学費	31
3-5-2	家計の悪化による影響	33
3-5-3	増加する交換留学	33
3-6	日本人の内向き志向に関する考察	34
3-6-1	求められる高度な語学力	35
3-6-2	コンフォート・ゾーンへの滞留	35
3-6-3	内向き化と二極化	36
3-7	小括	36
第4章 まとめ		
		37

第Ⅱ部 現代の若者のライフコースに関する考察	39
第1章 現代の若者の意識	
1-1 若者を取り巻く社会	40
1-2 現代の若者の特徴	40
1-2-1 若者の仕事観	40
1-2-2 若者の恋愛観	42
1-2-3 ネット社会の弊害 —メディアが及ぼす3つのC—	43
1-2-4 「さとり世代」	43
1-3 現状に満足している若者	44
1-4 未来に不安を抱く若者	45
1-4-1 未来を良くしようという意欲	46
1-5 ライフコースの分布	47
1-6 夢を持たない若者	48
1-7 小括	48
第2章 海外志向のライフコース	
2-1 海外志向の若者	49
2-2 ワーキング・ホリデー	49
2-2-1 若者にとっての「ワーホリ」	50
2-3 海外ファームステイ	51
2-4 海外ボランティア	51
2-4-1 「海外ボランティア」という選択	52
2-5 バックパッカー	54
2-5-1 国内バックパッカーの歴史	54
2-5-2 バックパッカーの心理	55
2-6 小括	56
第3章 内向き志向のライフコース	
3-1 内向き志向の若者	57
3-1-1 パラダイス鎖国	57
3-2 マイルドヤンキー	57
3-2-1 マイルドヤンキーの特徴	58

3-3 「フリーター」という選択	58
3-4 小括	61
第4章 若者にとっての「留学」	
4-1 「留学」の在り方	62
4-2 留学の類型化と事例	63
4-3 留学の「成功」	64
4-4 今後の留学のトレンド	65
第5章 まとめ	
おわりに	68
参考文献・参照HP	69

## はじめに

「カンボジアの子どもたちが、地雷で負傷している。」私が中学生の頃、あるテレビ番組でこのようなことを目にした。その理由は、内戦時の地雷がまだ残っている地域に“地雷注意”の看板の文字が読むことができずに入ってしまうというものであった。その時、自分の生きてきた世界とは全く異なった世界に私は大きな衝撃を受けた。また、その頃「僕たちは世界を変えることができない」というカンボジアの学校建設を日本の医学生らが実現させようと奮闘した実話を基にした映画があった。私はその映画のタイトルに一瞬で引かれてしまった。そして、その頃から漠然と海外に興味を持つようになった。そして大学在学中に、海外留学を実現しようと考え、いざ旅立ったのである。私は3年次終了後、大学を休学してカナダのバンクーバーに半年間、語学留学に行った。英語力の向上と海外での生活への憧れを持って留学に臨んだ。帰国後、達成感やこれからさらに勉強したい、色々なことを知りたいと思う欲とともに、勉強や準備期間の確保の甘さなど後悔するものが残った。私の留学前は、漠然とした目標だけを持ち臨んだが、下調べなどの準備が十分ではなかったと考える。この論文のテーマ設定の大きな理由もここにある。私の留学で出会った、様々な人に興味を持ったことから、この論文を通して「留学」の変遷を時代の流れや社会的背景とともに知るとともに、現在の若者がどのようなライフコースを選択していくのかについて迫っていききたい。

本論文は2部構成で、第1部では、留学の起源から日本の海外留学の歴史、戦後日本における留学の変容と現代の留学の概要をみていく。また、留学の変容を様々な社会的背景から考察する。第2部では、現代の若者が置かれている状況とその背景についてまとめる。また、どのような若者を取り巻く社会で、若者がどのような価値観を持っているのかについて考察する。さらには、若者がどのようなライフコースを選択しているのか分析し、特徴的なライフコースをまとめていく。最後には、自らの留学の経験を生かして、論文を作成する中で今後の留学があるべき姿について考察していききたい。

## 第 I 部

### 戦後日本の留学の変容と考察

## 第1章 海外留学について

### 1-1 留学とは何か

留学とは、一般的には国外に在留しながら教育を受けることを指す。また、国外に限らず国内の他地域や他組織に在籍しながら教育を受けたり、研究したりすることも国内留学と呼ばれる。

国内留学はごく一般的であり、身近な例として自らの都道府県外の進学校に進む学生や部活動などで強豪校へ進学する学生も国内留学といえる。すべてのスポーツにおいて言えることであるが特に、高校野球においては野球部の強豪校に進学するために遠くの地域にまで若者が流れる例が多く、学費の免除や奨学金の支給など特別な待遇をする野球特待生制度の問題がある中で国内留学が目立っているのが現状である。その他にも、いじめ対策としての転校や不登校による転校などの理由により都市部から地域などの過疎地域への山村留学、宗教上の理由からある特定の宗教系の学校に進学するものもある。また、芸能活動をするために地方から都市部の学校に進学するものも国内留学といえる。

#### 1-1-1 留学の起源 —「エミール」ルソーによる教育論—

ここでは留学の起源として、「エミール」の第5編、旅についての中で記されているルソーによる留学論をもとに記述していく。

この節では、まず「青年が旅をすることはよいことかどうか」という質問から始まる。ルソーは「書物の濫用は学問を殺す」と考え、人は本を読むことで多くのことを知るがそれが全てであり、他に学ぶ必要がないと感じてしまうと述べているのである。そのことを「現代ほど書物が読まれていた時代はないが、また、現代ほど人がものを知らなかった時代もない」という言葉で表している。その上で、ルソーは1つの国民しか見たことのない人は、人間そのものを知ったことにはならず、共に暮らした人たちを知っているだけに過ぎないという。したがって、本で読むのではなく実際に、その国々に赴いて自分自身の目で見るということが必要なのである。この本では、青年エミールは母国を持たないものとして設定されているため、彼の留学の目的は帰国して旅で得た教育を活かすというものではなく、彼がどの国に所属するかを選ぶということである。「乱暴な政府や、迫害する宗教や倒錯した習俗」の危険があり、「特に貴族や金持ちのいじめから守られ」、こうした「危険から守られて家族と共に幸せに暮らすことができる避難所をヨーロッパに選ぶ」ことが、エミールの留学の直接の目的である。

これは現代の母国を持つ留学生と本質的に違いはなく、我々は、母国を捨てる権利を持っている。留学によって他国を知ることで初めて自分の国の良さや悪さを知ることができ

る、その上で帰国して母国に住み続けることは、偶然ではなく自らの意志によって母国を祖国として選択したことを意味するという。

こうしたルソーの確立した、外国への旅行や留学によって教育は完成するという人格完成のための留学論がルネサンス以降広まり、海外留学の教育的意義が強調されるようになり、留学をする層も広がったのである。

## 1-2 日本の海外留学の歴史

島国である日本において留学の歴史は古く、古来より大陸から新しい知識や技術がもたらされた。

### 1-2-1 古代から中世～近世

記録に残されている最も古い日本人の海外留学は、善信尼という女性である。日本最初に出家した尼僧の一人である善信尼は、「百済に行って仏教の戒律が学びたい」と願い出て、588年善信尼が15歳のとき百済の使節団が来日した際、帰りの船に乗り百済に渡った。590年に帰国後11人の女性に得度し、仏法興隆貢献したと伝えられている。

日本側の記録によると607年に聖徳太子が当時最大の国であった隋と対等な関係を結ぶために小野妹子を隋に派遣した。また、隋が滅び、唐が興った後も先進的な技術や制度、仏教経典や海外情報などを収集するために、630年から遣唐使として多くの人々が派遣された。遣隋使小野妹子に従って隋に渡った、高向玄理や南淵請安は32年間、旻は24年間、律令や仏教、易学を学んだ。高向玄理は640年に帰国後、大化の改新で国博士となり八省百官を定めた。南淵請安は帰国後、学者として中大兄皇子、中臣鎌足の師となり律令に基づいた唐の中央集権国家体制や儒教などを教え、大化の改新の新思想に大きな影響を与えたとされる。

その後、唐に派遣された道昭、阿倍仲麻呂、吉備真備、玄昉などがいる。道昭は『西遊記』で有名な三蔵法師・玄奘に師事して法相数学を学んだ。また、武術の達人で中国武術を日本に持ち帰った人物との説もある。阿倍仲麻呂は、歌人であり外国で活躍した日本人としては歴史に残る最初の人とされる。若くして学才を謳われ、717年遣唐使に同行し唐に渡ったのち、鑑真の来日に尽力し後進の遣唐使らに協力した。しかし、仲麻呂は唐で学んだことを日本に持ち帰りたいと何度も帰国を願い出たが叶わず、許しが出たのは入唐から36年後であったが結局、帰国できずに長安で死去した。

図 1-1 善信尼



出所：Don Pancho HP

留<sup>るがくしやう</sup>学生は奈良時代からあった言葉で、「行った先に留め置かれる」学生という意味であり、「留学生」とは、元々は十数年から 30 年以上の間、現地で勉強する人のことであった。これに対して、短期留学の人は還<sup>げんがくしやう</sup>学生と呼ばれ、学問僧の短期留学生の場合は還学僧であった。

12 世紀には、大陸との交流が盛んになり大陸仏教への関心が高まり、各派の僧が南宋に相次いで留学した。栄西は 1167 年と 1187 年に入宋し天台山万年寺などで禅を学び帰国後は、鎌倉にて臨済宗を広めるなど新宗教活動は国内の僧に大きな影響を与えた。また道元は、栄西に禅を学び、宋からの帰国後は永平寺を建立し日本の曹洞宗の開祖となった。元寇後、大陸との関係が途絶するが、14 世紀初頭から、私的留学を行う僧の渡航が活発化し、明代時代にかけて留学僧の往来の最盛期を迎えることになった。室町時代に入ると倭寇対策のため日明貿易以外では中国への渡航が禁止される。その後、戦国・安土桃山時代の天正遣欧使節、朱印船貿易、江戸時代の鎖国体制においては異国への窓口であった長崎の出島への国内留学という形で、細々とではあったが海外からの文化が国内に入っていた。江戸時代後期には、輸入された学問や科学が蘭学として徐々に広まっていった。

## 1-2-2 近代の留学

近代の日本における海外留学は幕末に始まった。1862 年に日本へ近代技術を導入するために江戸幕府の命を受けて、オランダのライデン大学に赤松則良、伊東玄伯、内田正雄、榎本武揚、沢太郎左衛門、田口俊平、津田真道、西周、林研海らが留学した。彼らは、オランダでそれぞれ必要な知識を貪欲に学んだ。例えば、赤松則良や榎本武揚はオランダ海軍軍人であるカッテンディーケから航海術や砲術、測量術などを、西周はフィッセルング教授から、自然法や国際公法、経済学などを学んだ。次いで、幕府はヨーロッパ諸国にも派遣した。1862 年のライデン大学への派遣が、日本人として初めて海外の大学で学んだ留学となっている。

1863 年には、鎖国中だったため幕府に内緒で長州藩がイギリスに伊藤博文、井上馨、遠藤謹助、井上勝、山尾庸三の 5 人を留学させている。現在では「長州ファイブ」と呼ばれる彼らはユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンで学んだ。1865 年には、薩摩藩からも五代友厚、森有礼らの留学生がイギリスへ向かい、長州ファイブ同様にユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンで学んだ。伊藤博文は、渡英を通して圧倒的な国力の差を目の当たりにしたことで開国論に転じた。1866 年には留学のための外国渡航が幕府によって許可され、幕末期の留学生は約 150 人に達したのである。明治時代に入ると、政府は近代化、欧米化を目指して富国強兵、殖産興業を掲げた。このなかで海外留学が重要な国策の一つとなったのである。

### 1-2-2-1 岩倉使節団

1871年に岩倉具視を正使として、使節46名、随員18名、留学生43名の総勢107名で構成されアメリカやヨーロッパ諸国に派遣された大使使節団である。

岩倉使節団の目的は大きく2つある。1つは、不平等条約の改正に向けた予備交渉である。幕末期に欧米諸国と結ばれた不平等条約を改正し、独立した一国家として各国と平等な形での国際関係を築くことが明治新政府の重要課題であった。しかし実際、使節団は最初のアメリカとの交渉の段階で実質的な改正交渉は不可能と気づき、その後訪れたヨーロッパ諸国では、改正の希望を伝えるに留めなければならなかった。もう1つの目的は、欧米各国の国家制度、産業技術、伝統文化などを視察することであり、新しい国づくりに挑んでいた明治新政府にとって、近代的な産業や、政治制度、司法制度、社会制度など、他国の優れた点を学んでそれを自国に採り入れること重要な課題であった。また、同行した留学生たちも各国に留まって勉学に励み、後に帰国して活躍することが望まれていた。

幕末から明治初期にかけ、欧米諸国に留学したのはほとんどが男性であったが、岩倉使節団に同行した留学生の中には、アメリカに留学する女性が5人いた。写真左から、永井繁子(10歳)、上田梯子(16歳)、吉益亮子(14歳)、津田梅子(6歳)、山川捨松(11歳)である。

上田梯子は体調不良、吉益亮子は眼病を患って、1872年に日本に帰国した。すでに嫁ぐ年頃で全く異質な環境への適応が困難だったと思われる、ホームシックが原因であるともいわれている。その後、年少の3人が留学を続けることになり、津田梅子は11年、永井繁子は10年、山川捨松は11年の長期留学を終え帰国した。津田梅子は日本での生活があまり幸せではなかったようで子のいないアメリカ人に迎えられすぐに馴染み帰国の際には日本語を忘れていたという。帰国後は、山川捨松が協力し1900年に創立した女子英学塾は、津田塾大学として今も残っている。山川捨松は、兄健二郎がすでにアメリカ留学中であり、日本語の勉強も常に行い、幼いながら様々な困難を乗り越えてきた実績、責任感、それと

図 1-2 岩倉使節団  
(左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通)



出所：フォトレスキュー写助

図 1-3 女子留学生



出所：鹿鳴館の貴婦人 HP

天性の素質を持っており、ヴァッサー大学の音楽科にてピアノを系統的に学び卒業したことで、日本で最初にアメリカの大学を卒業した女性になった。永井繁子は、自由で裕福な環境で明るくのんびりと育ったこと、幼かったことも幸いして、そのままアメリカ人家庭に溶け込むことができた。在米生活を大いに楽しみ、その後、日本人留学生と恋愛結婚した。それぞれに女性の教育機関を向上させるために尽力した。

### 1-2-2-2 森鷗外と夏目漱石

明治時代を代表する文豪、森鷗外は 1862 年に生まれた。東京医学校予科に年齢をごまかし満 11 歳で入学、後に本科生となった森鷗外は 19 歳の最年少で卒業した。

森は本科を卒業後、陸軍省に入省し、東京陸軍病院に勤務した。そして、医学的に発展途上であった日本のために、医学の最先端であったドイツで衛星制度を学ぶためにドイツ留学を命じられた。ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリンとドイツ国内で 4 年間、医学を学んだ。陸軍軍医として

採用された森鷗外は、1916 年陸軍省医務局長を辞するまで 35 年に渡って軍医として活躍し、最高位の陸軍軍医総監まで登りつめた。医学校時代、日本中の優秀な学生が集まっていた中で、2 歳近く若い森鷗外であったがその秀才ぶりは一目置かれていた。ドイツ語の授業が多い中で、予備校などで習得していた他学生は苦ではなかったものの森鷗外のノートは縦書きで記録されていた。ドイツ語までは習っていないのだろう、と考え親切心でノートを見せた友人は愕然とした。森鷗外は、ドイツ語を全て中国語、つまり漢文に翻訳して記録していたという。

同じ明治時代の文豪である夏目漱石は 1867 年に生まれた。帝国大学を卒業後、孤島師範学校の英語教師になるも、日本人が英文学を学ぶことに違和感を感じ始めていた。1900 年、文部省から英語教育法研究のためにイギリス留学を命じられた。胃や精神の病気という説、研究に没頭する姿を見て精神疾患を患っているとの噂が原因とする説などがあるが、1902 年に急遽帰国が命じられた。当時の大臣の年俵に相当する留學費を受け取ったが世界一物価の高いロンドンで書籍購入などの研究費だけでなく渡航費や下宿代、食費などのすべての生活費を賄わなければならず、いつも金欠に悩まされまともな食事が摂れず、それが原因で体調を崩したとも言われている。

図 1-4 森鷗外



出所：森鷗外記念館 HP

図 1-5 夏目漱石



出所：文学の館 HP

### 1-2-3 戦後から現在の留学

明治期以降は、官費留学が制度化された。また、ある程度の財力のある人やパトロンを得た者が私費留学によって海外留学を行っていた。戦後は、奨学金や社費留学が制度化されてきた。また現在では、1985年プラザ合意以降の円高傾向により海外留学は一般に身近なものとなり目的や動機は多様化してきている。公費留学の門は狭く、留学エージェントの参入などの影響もあり、今日は私費による留学がほとんどである。

### 1-3 現代の海外留学の種類と制度

海外留学と一言にいても、目的や行き方、滞在方法などは違い様々な種類がある。ここでは、海外留学の種類を目的と制度、滞在方法で分けてみていく。

#### 1-3-1 目的からみる海外留学

国内の教育機関に在籍しながら、海外に留学するものから社会人として個々のスキルアップなど経験を積むための留学などがある中で、目的別に大きく3つに分けてみていく。

##### (1) 語学留学

海外留学の王道とも言える、語学留学は学校で語学を学びながら実際の生活の中で使い、実践的な語学力を養うものである。特に英語圏への語学留学では、語学学校や大学付属の研修機関でESLコースを受けることが多い。ESL (English as a Second Language) は、第2言語としての英語という意味で、一般的に留学生のための英語コースである。このコースは、世界各国から英語を学びにくる人々でとてもインターナショナルな場である。現地の大学などへの入学を目指している留学生が集中的に英語を学ぶ場でもあり、正規留学のための準備や、高校や大学の長期休暇中の語学力向上という目的がほとんどである。話す、聞く、書く、読む、の4技能を中心にした基礎英語の他、ビジネス英語、試験準備、進学準備、英語教員養成のコースは学校によって様々である。

##### (2) 正規留学 (高校・大学・大学院)

正規留学とは、高校、大学、大学院などの教育機関で直接学ぶことを指す。現地の学生と一緒に場で授業や講義を受けるため、高い語学力が必要とされる。それでも、海外の大学進学留学をするメリットは、日本の大学の専攻も多種多様になってきた今日であるが、まだ海外の比ではなく、日本にない学問分野やより進んだ内容を学ぶことができる。例えば、アメリカの場合では約900分野にわたって学ぶことのできる専攻があると言われ、マサチューセッツ工科大学のストリートファイト数学や、コーネル大学のいかに効率的に速く木登りができるかに価値を見出すコース、オーバーリン大学の美人コンテストの勝利法

など、子どもの興味の延長を本気で研究するような分野まで設置されているのである。また、異文化適応能力、コミュニケーション能力、自立心、ストレス耐性などを身につけることができる。しかし、一方で文化や習慣の違いだけでなく、卒業資格を得ることがより困難な海外の大学では、国内の大学進学者に比べて退学などの挫折者数が増加すると考えられる。

### (3) 専門スキルアップ留学

専門スキルアップ留学は、その名の通り専門的分野において日本より進んだ地で自らのスキルアップを目指す留学である。今日、日本では不況や就職難などによってより高いスキルや多様な資格が求められる。就職前の学生や、転職を考えている社会人が「社会において自分の価値を確立できる何か」、「さらなるキャリアアップを図るための知識」を得るための手段にこの留学が存在している。また、目的や方法によって専門性も期間も予算も様々であり「オーダーメイドスタイルの留学」である。

ここでは、専門スキルアップ留学についてジャンル別にいくつか紹介する。

表 1-1 ジャンル別の専門スキルアップ留学

ジャンル	学習内容	帰国後の職業の例
ビジネス	企業経営、経営、イベント管理、 ファイナンシャル	国際貿易業務、国際秘書、海外営業、エグゼクティブ
ツーリズム、ホテル、 ホスピタリティー	サービス業務、飲食サービス、接客能力、旅行業務	ホテルフロント、コンシェルジュ、ツアーコンダクター
アート、 芸術	絵画、写真、デジタルメディア、 ビジュアルデザイン、製版	デザイナー、写真家、画家、 建築家、漫画家
料理	商業料理、食品加工、製菓、製パン	コック、パティシエ、ソムリエ、バリスタ
IT、グラフィックデザイン、映画、映像	システム分析・設計、サーバ構築、 Web デザイン、映画制作	システムエンジニア、プログラマー、映画監督、脚本家
ファッション、 ジュエリー	ファッションデザイン、商品政策、卸売業、製品管理	ファッションデザイナー、スタイリスト、ショップ経営

出所 EDU\*Japan HP より筆者作成

### 1-3-2 海外留学の制度

海外留学の方法を選択する上で、自らの立場や環境などから留学の制度を利用することができる。ここでは、海外留学をする際の制度についてみていく。

表 1-2 海外留学の制度

制度	概要
交換留学	国内の学校と交換留学協定を結んでいる海外の学校との間で、留学生を相互に派遣、受入する制度である。留学中の学費は、国内の学校にのみ納めることになる。長期休暇を利用するものから、1学期間、1年間など学校によって様々であり、単位互換が可能な大学もある。
私費留学	費用を自己負担する留学である。留学の開始時期や期間は個別で選択できるため、学生だけでなく社会人にとってもフレキシブルなプログラムであると言える。また、語学力向上やスキルアップ、文化交流など個々の目的に応じた教育を受けることができる。
公費留学	国内外の財団等から給付金型の奨学金を利用する留学である。給付を受けるためには、ある程度の資格・要件が必要であるが近年では比較的、受けやすくなっている。また、アカデミックな留学だけでなくインターンシップやボランティア、フィールドワークなど学校に通わない多様な活動に対し手厚い給付がされる。 (例)・文部科学省 (トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム) ・日本学生支援機構
社費留学	社員として企業に所属しながら、企業が留学の費用の一部または全部を負担する留学である。また、企業によっては、留学期間中でも一部の給料を支給するところもある。社員の語学力や専門スキルアップを狙い、企業により多くの利益をもたらすことを目的として身分を保証したまま経済支援を行う制度である。MBA 取得などを勧める商社や学習塾などの例がある。
外国政府等奨学金留学	各国の大使館又は大学を通して募集を行っており、留学生を受け入れる側の国の政府が費用を負担する留学である。留学生の受け入れる国が定める制度によって要件や、負担費用は様々である。 日本では、1954年に創設された国費外国人留学生制度により、今日までに全世界の約160ヶ国・地域から約92,000人が日本で留学を行っている。日本の国費外国人留学生プログラムでは研究留学生、教員研修留学生、学部留学生、日本語・日本文化研修留学生、高等専門学校留学生、専修学校留学生の6種類がある。

出所：留学ジャーナル、日本留学総合情報、All about より筆者作成

### 1-3-3 渡航先での滞在方法

海外留学において重要になってくるであろう、渡航先での滞在は主にホームステイ、学生寮、アパート（ルームシェア、一人暮らし）がある。ここでは、各滞在方法のメリットとデメリットなどをみていく。

表 1-3 留学先での滞在方法のメリット・デメリット

	メリット	デメリット	費用
学生寮	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現地の学生や語学留学を目的とした学生と生活ができる。</li> <li>・学校の付近に存在することが多く、通学の時間がかからない</li> <li>・比較的自分のペースでの生活が可能である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2人部屋などが多く、バスルームやキッチンなど共同生活であるため、生活習慣や文化の違いからトラブルになることがある</li> <li>・部屋数や入寮時期に限りがある</li> </ul>	安
ホームステイ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現地の一般家庭の生活を体験しながら日常生活を送ることができる</li> <li>・部屋と食事が提供されるため勉強時間を確保できる</li> <li>・光熱費などの諸費用が一括である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通学に時間と交通費がかかる場合が多い</li> <li>・生活リズムや性格、食事などホストファミリーとの相性が重要になる</li> </ul>	
アパート (ルームシェア、一人暮らし)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のペースで生活ができる</li> <li>・食事などを自炊することで節約できる</li> <li>・街並みや価格帯など自分で選択が可能である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部屋探しや契約の手続きなどを自分で行わなければならない場合がある</li> <li>・ルームメイトとの関係性が重要になる</li> </ul>	高

出所：留学ジャーナルより筆者作成

### 1-4 現代の海外留学の目的と意義

海外留学をするからには、誰しも何かしらの動機が存在するであろう。留学をするにあたって自分にとって何が目的なのか、目標とするものは何かを考えることが海外留学をする上で最も重要なことなのではないかと考える。なぜならば、海外留学を決める大半の人

はなんとなく「海外での生活をしてみたいから」や「海外での経験を積みたいから」など漠然とした理由を挙げることが多い。しかし、しっかりとした動機付けや明確な目標設定をすることで留学の費用削減や留学の目標達成に大きな違いを生み出すことがあるからである。具体的な目標を持つことで、帰国後「いかに留学が自分にとって有益であったか」を留学の成果として感じることができ、学校選択においても目標にあったカリキュラムを選択できるなど留学費用の削減にもつながるのである。では何を目的として留学に臨むべきなのか。

#### 1-4-1 なぜ留学するのか ―語学力の向上―

日本人が海外留学を選択する上で最も多い理由と言えるのが、「語学力の向上」である。ここでは、特に多い英語圏への留学について記述していく。自分自身、もっと英語が話せるようになりたいという志を持って留学を選択する人はとても多いのではないかと考える。日本の大学に海外からの留学生がいたり、社会人になった時に外国人と接する機会が増えたり、街中でも外国人を見かける機会が増えたりと、外国人や英語という存在がとても身近にあるということは確かである。しかしながら、中学 1 年生から英語の授業を受けてきたにも関わらず、いざ外国人を目の前にすると上手くコミュニケーションが取れないという場面はとても多いのではないかと感じる。

では、なぜ英語力向上という目標を立てて留学という選択肢を選ぶのか。それは英語のアウトプットである「話す」という行為が中心になってくるからではないか。今日の日本の英語科教育では、コミュニケーション能力の向上を図ることを目的としながらも実際には、椅子に座りながら一同に黒板の方を向いてノートをとったり、少しの音読をしたりという文法やリーディング、あるいはリスニングの授業がなされている。1 番の目標とも言える「英会話」がおろそかになってしまっている中で、海外留学によって自分を「話す」という行為が強制的にでも求められる環境に身を投じることで、自分の英語のアウトプットの訓練をしたい、自分の英語力が実際の生活でどれだけ使うことができるのか試してみたいという意見が多数ではないだろうか。学校の授業中、友人とランチをしながら、ショッピングをしながら、また家に帰ってからも生活の全ての時間を英語の「話す」そして「聞く」という英会話に充てることができる。教科書の内容だけでなく、実際のネイティブスピーカーが使っている表現を聞く、そしてアウトプットするなど、そのような環境は海外留学ならではの体験であると言えるため、英語力の向上という目標を掲げて留学を選択する者は多いのではないだろうか。

#### 1-4-2 なぜ留学するのか ―専門的知識の習得―

海外の大学や専門学校に進学することも、日本人にとって留学の大きな魅力であり、目的であると言えるだろう。一定程度の語学力は最低限必要になってくるが、英語を学びながら、「英語で学ぶ」ことができるのである。日本では学ぶことのできない事柄や日本よりも進んだ分野で最新の知識や技術を学ぶことも可能である。留学をして学ぶ専門分野としては、経営学などが多く、ビジネススクールに代表されるように海外でビジネスを学ぶ者は少なくない。また、単に英語を学ぶだけではなく、教えるための英語を学ぶことも目的としている者も多い。各スキルの教育方法を実際の英語圏で学ぶということは外国人留学生にとってとても魅力的で価値のある機会ではないか。

これら専門分野を学ぶために留学を選択する目的は、共通して留学後の就職や転職に役立てることではないか。「海外でこんな経験をし、こんなことを学び、こんな力が身についた」ということは就職・転職で大きなプラス要素になることは間違いないであろう。実際に、多くの企業が海外留学を経験した学生を積極的に採用している。海外留学が就職活動に不利になるという考えは少なくないが、そういった点をカバーするためにもアメリカ、イギリス、オーストラリア、中国、シンガポールなどで日本人留学生を対象とした就活イベントが開催されている。特に、秋に行われるボストンキャリアフォーラムでは約 200 の企業が集まり日本人留学生を対象にしている。外資系企業や日系の大企業が集まるなど、学生はもちろんのこと、企業側にとっても優秀な学生を確保したいという点で、海外での就職活動イベントは有意義であると言える。

#### 1-4-3 海外留学の意義

文部科学省は、『留学生 30 万人計画』の骨子とりまとめの考え方」に基づく具体的方策の検討の中で、日本人学生の海外留学の意義として、国際感覚を磨くことで個人としての意義と国としての意義を挙げている。個人としては「国際体験を通じた国際理解・知識の拡大、語学力の向上など学生の能力や可能性を広げ、留学を通じ国境を超えた幅広い人的ネットワークの形成につながる」としている。また国として「国際的な競争環境の中での国際的通用性のある人材の育成や受け入れと同様に人的ネットワークの形成による相互理解と友好関係の深化が世界の安定と平和に資するといった安全保障の観点、我が国大学等の教育研究水準の向上など重要な意味を持つものである」として、海外留学の意義を述べている。加えて、「自大学等の学生の海外留学の促進は、大学等にとっても、双方向の相互交流に基づく大学等間交流の拡大や、オフショア・プログラム、日本語教育・日本文化の普及など日本の高等教育機関の海外展開に活用することもできるなど得るものは大きい」と述べ大学としての日本人学生の海外留学の意義を示している。

また企業にもおいて、市場の国境がなくなり経済のグローバル化が進む中で、国際社会で通用する「グローバル人材」の需要が高まっている。海外の工場や事業拠点など企業自体がグローバル化している場合と、国内の企業において外国人留学生の採用や英語の社内公用語化などの企業内のグローバル化が進んでいる。経済産業省のグローバル人材育成委員会の報告書によると『「グローバル人材」は共通して、(1) 社会人基礎力、(2) 外国語でのコミュニケーション、(3) 異文化理解・活用力をもっているため、グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えをわかりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立ってお互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる』と考えており以上の3つの能力は「グローバル人材」に共通して求められる能力としている。

これらのように、個人だけでなく国や企業にとって日本人学生による海外留学の意義がある。

### 1-5 「留学の第3要素」の確立

留学の変容の中で、新しい若者のライフスタイルが見えてきた。前述の留学の目的を元に、語学力の向上を「第1要素」に、専門知識の習得を「第2要素」と仮定すると、今日の海外留学には新たに「第3要素」が確立したと考える。私の考える「留学の第3要素」とは、生活を軸や目的とした留学である。どんな留学にも生活は必須の要素ではあることは間違いないが、語学や知識の習得を目的とせず海外での生活を送ること自体を目的とした留学である。このような留学を、以前までは無駄や失敗とされてきた。「留学」ではない「留学」とも言える。特に明確な目的を持たずして海外に渡り、語学学校に通うわけでもなくただ現地の生活を送ることは、一見、定年退職をして貯金で海外に暮らす高齢者のようにも思えるが、そこには、ただ遊んで暮らしていきたいという安易な考えではなく何か別の思いや考えがあるのではないか。そうした、新しい留学のカタチや若者のライフコースについては第Ⅱ部で詳しく記述していく。

### 1-6 小括

大陸から仏教や新しい技術、制度を取り入れるために留学が始まり、明治時代には医学や英語教育法研究のために国から命じられ、帰国後も国のために貢献するという形であるものが多かった。時代が進み、円高の影響、日本が先進国のひとつになったこと、で海外が我々一般の生活に身近なものになっていくとともに留学というものが多様な意味を持つ

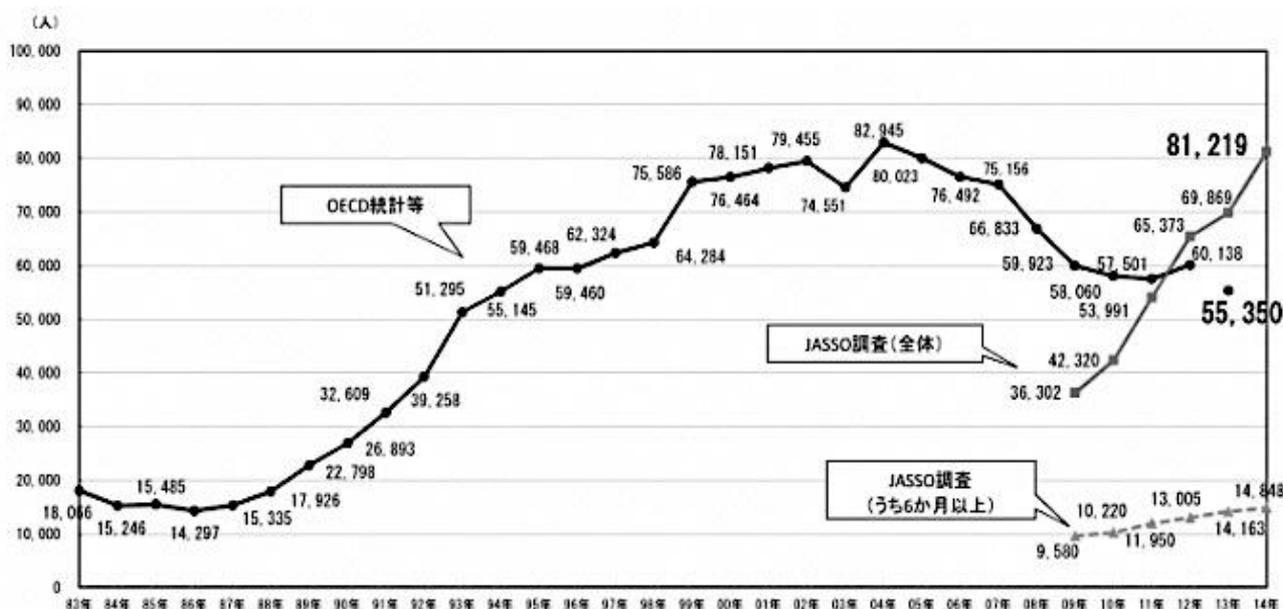
ことになった。海外の大学で学ぶこと、国のために学ぶことが前提であった留学は減少傾向にある一方で、留学生自身のスキルアップや国際的な人格形成を目的としながら、必ずしも教育機関に通い学ぶことだけが留学ではなくなってきているのである。

## 第2章 データでみる日本人の海外留学

### 2-1 全体的な日本人留学生数

日本人の留学生数が減っている、と最近のメディアなどではよく耳にし、目にする。では、実際のところはどうであるのか。ここでは、様々なデータから日本人の海外留学生の推移や特徴を見ていくことにする。

図 2-1 海外の大学や大学院等の高等教育機関で学ぶ日本人学生数の推移



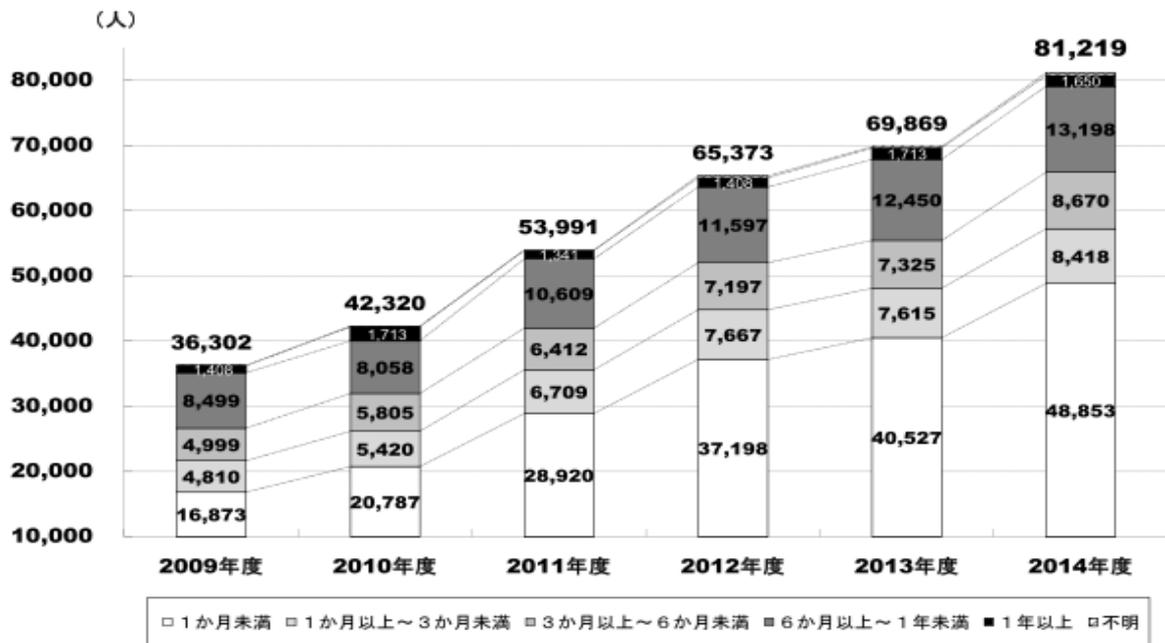
出所：OECD 統計等：OECD「Education at a Glance」、ユネスコ統計局、IIE「Open Doors」、中国教育部、台湾教育部  
 JASSO 調査：外国人留学生在籍状況調査（(独) 日本学生支援機構）

OECD 及びユネスコ統計のデータに注目すると、1986 年から増加してきた日本人留学生は 2004 年の 82,945 人をピークに 2011 年まで減少傾向にあることが読み取れる。2010 年の 58,060 人は、ピーク時と比較すると実に 30%の落ち込みである。また、2013 年度から集計方法が変わったため、過去のデータとの比較が難しくなっている。

一方、JASSO 調査のデータに注目すると、2009 年の統計開始以降、大幅に増加していることが読み取れる。これらの差は、統計データの違いによるものである。OECD 等調査では、海外の高等教育機関に入学し、そして卒業するといった留学生数の統計であるが、JASSO 調査では大学間の協定等に基づく日本人学生留学状況調査の中で、「短期の交換留学等も含む」としているために、この差が生まれるのである。

そこで、JASSO 調査による大学間協定等に基づく留学期間別日本人留学生数について注目していく。

図 2-2 日本人の海外留学生数の推移



出所：(独) 日本学生支援機構「協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」

注) 対象は、日本国内の高等教育機関に在籍する学生等で、日本国内の大学等と諸外国の大学等との学生交流に関する協定等に基づき、教育又は研究を目的として、海外の大学等で留学を開始したもの及び、在籍学校において把握している限りにおいて、協定に基づかない留学をした者。短期の交換留学等も含む。

このデータを見ると、日本人留学生数は増加していることが読み取れる。特に、注目すべきなのは1ヶ月未満の短期留学である。1ヶ月以上の海外留学は、増加はしているもののそこまでの大きな増加ではない。一方で、1ヶ月未満の留学は著しく増加傾向にある。2014年度の留学生数81,219人のうち、半数以上の48,853人が留学期間1ヶ月未満なのである。

語学留学や協定等に基づく留学を含んだデータを見ることで、大学生の海外留学数はここ数年大きく増加していると言える。

## 2-2 国（地域）別の日本人留学生数

日本人の海外留学生数が増加傾向にある中で、ではどのような国や地域への留学を選択するのであろう。そこで次に、国（地域）別の留学生数の割合を見ていく。

表 2-1 国（地域）別日本人留学生数（2014 年度）

国（地域）名	協定等に基づく留学生数		協定等に基づかない留学生数	
	留学生数（人）	構成比（%）	留学生数（人）	構成比（%）
アメリカ合衆国	12,434	23.9	6,335	21.8
オーストラリア	5,170	9.9	2,106	7.2
カナダ	4,890	9.4	2,483	8.5
イギリス	4,262	8.2	2,602	8.9
韓国	4,217	8.1	1,316	4.5
中国	3,477	6.7	1,288	4.4
タイ	2,013	3.9		
台湾	1,991	3.8	983	3.4
ドイツ	1,719	3.3	1,049	3.6
フランス	1,681	3.2	1,057	3.6
フィリピン			1,200	4.1
その他	10,278	19.7	8,668	29.8
計	52,132	100	29,087	100

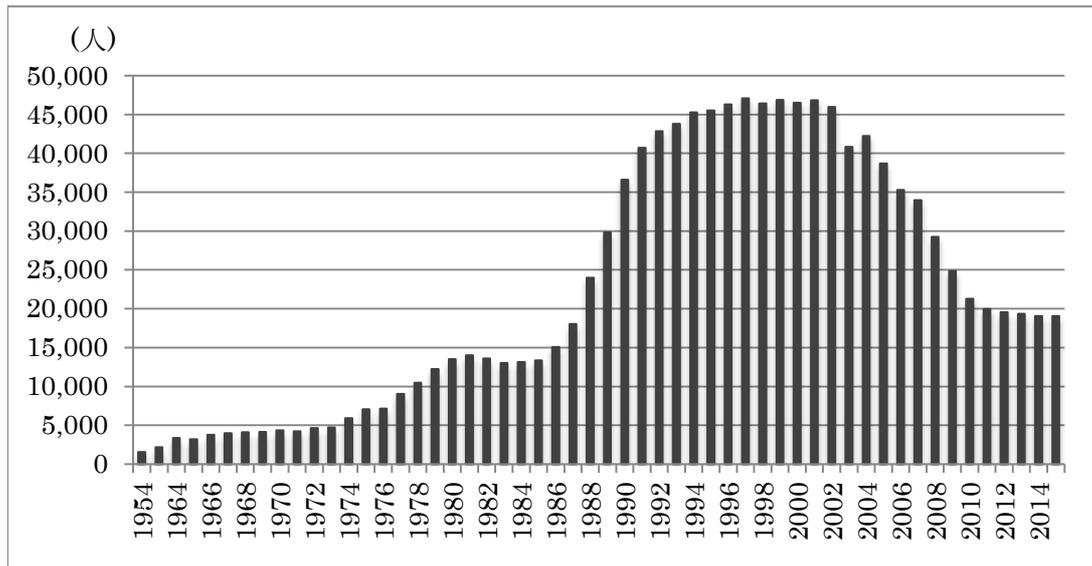
出所：（独）日本学生支援機構より筆者作成

大学間協定等に基づく留学生数を見ると、アメリカに次いでオーストラリア、カナダ、イギリスとなっている。協定等に基づかない留学生数では、イギリス、カナダ、オーストラリアとなっている。フィリピン、タイの違いは、大学間による協定締結校数の違いが考えられる。いずれにせよ、日本人の留学先としてアメリカが圧倒的に多いことが読み取れる。では、日本人のアメリカ留学は増加しているのだろうか。

### 2-2-1 日本人のアメリカ留学

日本人のアメリカの大学・大学院への留学は減っている。「ハーバード・ビジネススクールから日本人が消えてしまった」という話がある。1990年代のバブル期、アメリカ MBA 全盛の時代、金融機関やメーカー、商社の社員がハーバードやマサチューセッツ工科大学、スタンフォードといったアメリカのトップスクールに留学する光景が当たり前のようであったが、最近では稀である。近年では慶應大学や早稲田大学などの日本のトップスクールでも MBA コースが開講されていること、短期間で修了することができるヨーロッパやアジア諸国の大学といった選択肢があること、から多様化してきているのだと考えられる。

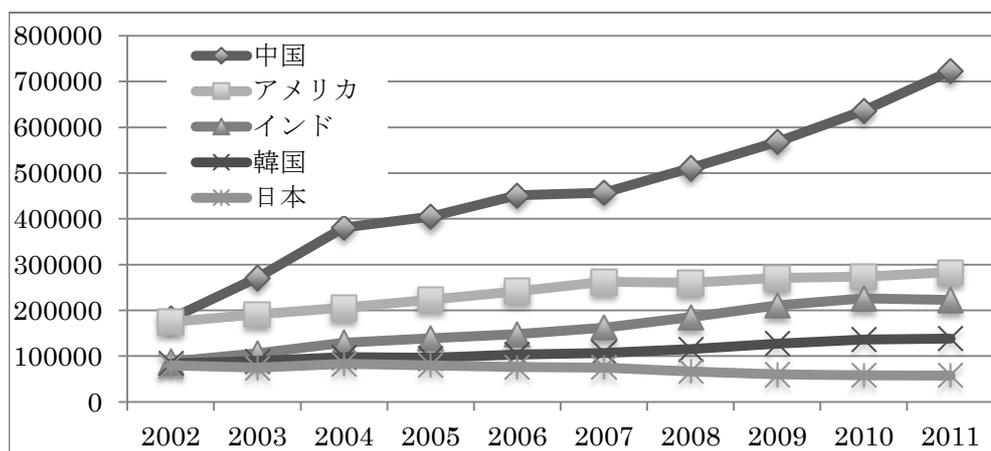
図 2-3 アメリカへの日本人留学生数の推移



出所：IIE Open Doors より筆者作成

日本人のアメリカへの留学生は、他のアジアからの留学生と同様に、1980年代半ばから急増し、5年間でおおよそ3倍になった。その後が2000年頃まで一定数を保ち、大きな変化は見られない。しかし、2000年代半ばから減少傾向にあることがわかる。

図 2-4 各国の海外留学の状況



出所：『Open Doors』、『Education at a Glance』より筆者作成

アメリカでの日本人留学生は1994-97年度まで国別では第1位を占めていたが、中国やインドからの留学生数が急激に増えた結果、1998-99年度国別順位第2位、2000年度第3位、2001-07年度第4位、2008年度第5位、2009年度第6位、2010-13年度は第7位、2014年度は第8位、2015年度は第9位へと下降した。

## 2-2-2 増加するアジア留学

アメリカへの留学が減少傾向なのに対して、近年、伸びてきているのがアジア諸国への留学である。特に、フィリピン、台湾、タイなどは人気がある。

フィリピン留学が急増している理由として、次の3点が考えられる。1つ目は、アメリカ、インドに次いで世界第3位の英語公用国だからである。欧米のように留学生活で英語が学べるのである。2つ目は、距離的な利点である。欧米への渡航のほとんどが10時間ほど要するのに対し、フィリピンまでは約4時間で、滞在が30日以内であればビザが不要であるなどアクセスが良い点である。3つ目は、コストが低いということである。1対1での英語教育が主流で授業料、食事、洗濯、掃除すべて込みの滞在費用を合わせても欧米への留学の約半分以下という破格の留学費用であることが挙げられる。

台湾への留学が増加している理由は、中国語需要の増加である。国内の企業でもHSK(中国語検定試験)を社員に求めるところが出てきており、台湾や中国、シンガポールなど中国語圏のニーズが高まってきているのである。

## 2-3 地域別・期間別の日本人留学生数

留学は欧米からアジアへ、長期から短期へと流行が移っていることが考えられる。ここでは地域別、留学期間別の留学生数を見ていく。

表 2-2 地域別・留学期間別日本人留学生(人)(協定等に基づく留学及び基づかない留学生数)

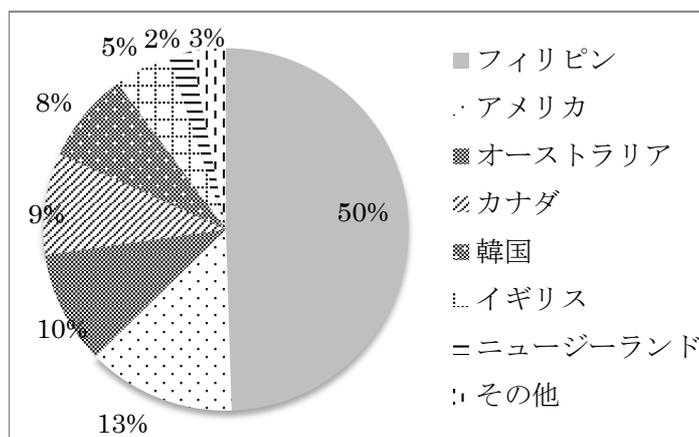
地域 \ 期間	1ヶ月未満	1ヶ月以上3ヶ月未満	3ヶ月以上6ヶ月未満	6ヶ月以上1年未満	1年以上	不明	計
アジア	18,931	1,289	1,873	2,374	357	83	24,907
中東	212	19	20	69	10	0	330
アフリカ	171	58	32	52	3	0	316
大洋州	5,333	2,289	657	1,125	110	42	9,556
北米	13,031	2,588	4,309	5,502	591	123	26,144
中南米	210	50	59	220	22	5	566
ヨーロッパ	10,951	2,125	1,498	3,692	534	52	18,852
その他	14	0	222	164	23	125	548
計	48,852	8,418	8,670	13,198	1,650	430	81,219

出所：(独)日本学生支援機構より筆者作成

アジアへの1ヶ月未満の留学生数が最も多いことがわかる。次いで北米、ヨーロッパとなっている。一方で、6ヶ月以上の留学を見てみると、北米が最も多く、次いでヨーロッパ、アジアとなっている。

図 2-5 語学留学における留学先割合

右の図を参考にすると、ある留学エージェントのデータではあるものの、語学留学の割合はフィリピンが半数を占めている。しかし、長期間の留学では北米などが多い。それらのことから考えられるのは、フィリピンなどの「近場」で基礎的な英語を学びながら海外生活に慣れることを行い、その次のステップとしてアメリカやオーストラリア、イギリスなどの国での長期留学を目指す者がいるということである。



出所：ラストリゾートより筆者作成

#### 2-4 専攻分野別の日本人留学生数

ここでは、どのような分野の者たちが留学を行うのかについて考える。海外留学の歴史でも取り上げたように、仏教や国交交渉の他に医療が未発達であった日本のために森鷗外や北里柴三郎、志賀潔、野口英世など医学者として海外留学を行なった者も少なくはない。

では、現代の留学はどうであるか。次の図は留学した日本人が国内の大学で文系、理系どちらの分野に属するかを割合で示したものである。

図2-6 日本人留学生の文系と理系の割合

文系	理系	不明
72.4	14.3	13.3

文系が72.4%と大きな割合を占めていることが読み取れる。理系は、わずか14.3%となっている。このことから、現代の留学は語学力などを目的に行う者が大きな割合を占めていることが考えられる。また、文系と理系での総合的に見た語学力の差も考えられる。

では次に、さらに細分化し専攻分野別に日本人留学生をみていく。

表 2-3 専攻分野別日本人留学生数

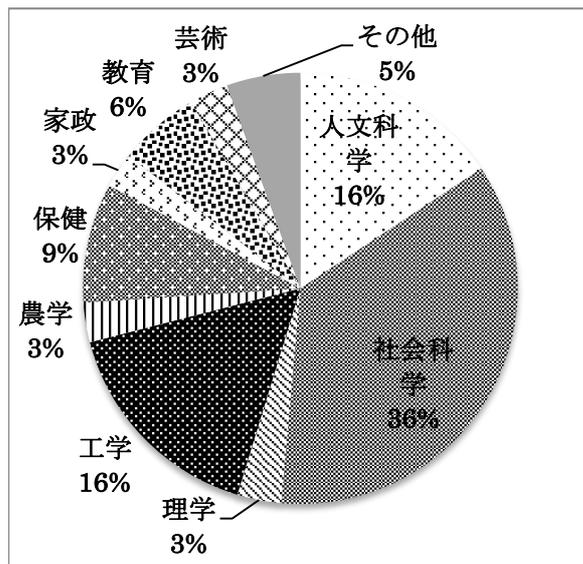
専攻区分	留学生数 (人)			構成比 (%)
	2004 年度	2009 年度	2014 年度	
人文科学	9806	17395 (8506)	31808 (13928)	61.0 (47.9)
社会科学	4836	2171 (657)	5023 (2936)	9.6 (10.1)
理学	168	113 (213)	417 (856)	0.8 (2.9)
工学	737	710 (438)	3483 (1795)	6.7 (6.2)
農学	199	489 (158)	1159 (485)	2.2 (1.7)
保健	385	801 (375)	2420 (1222)	4.6 (4.2)
家政	166	35 (375)	97 (117)	0.2 (0.4)
教育	481	558 (200)	816 (488)	1.6 (1.7)
芸術	135	163 (85)	394 (274)	0.8 (0.9)
商船	22			
教養	194			
その他	1439	1553 (1553)	4591 (3440)	8.8 (11.8)
不明・無記入		(84)	1924 (3546)	3.7 (12.2)
合計	18570	23988 (12314)	52132 (29087)	100.0 (100.0)

( ) 内は大学等が把握している協定等に基づかない留学数

出所：(独) 日本人学生支援機構より筆者作成

図 2-7 国内大学の専攻分野別学生数の割合

専攻分野別にみると、人文科学部が最も多い。国内大学の専攻分野別学生数の割合では、人文科学部が 16%なのに対して、留学生数は 61%を占めている。また、社会科学が 36%なのに対して、留学生数はわずか 9.6%にとどまっている。次いで、工学部、医学部を含んだ保健となっており国内の学生数と留学生数は比例している。人文科学部が多い理由として、文学や言語学などが含まれるからであると考えられる。



出所：総務省『学校基本調査』より筆者作成

## 2-5 男女別の日本人留学生数

前述の通り、日本初の留学は善信尼ら女性だとされている。しかし、その後は遣隋使や岩倉使節団、医学留学など津田梅子ら女子留学生はいたものの海外に行く人は男性が多く、割合を占めていた。そこで、現代の留学の男女比を見ていく。

表 2-4 地域別・男女別日本人留学生数（人）

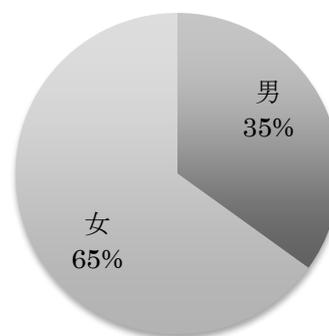
地域名	男		女		計	
	留学生数(人)	構成比(%)	留学生数(人)	構成比(%)	留学生数(人)	構成比(%)
アジア	10,652	13.1	14,282	17.6	24,907	30.7
中東	149	0.2	181	0.2	330	0.4
アフリカ	158	0.2	158	0.2	316	0.4
大洋州	3,358	4.1	6,198	7.6	9,556	11.8
北米	9,958	12.3	16,186	19.9	26,144	32.2
中南米	251	0.3	315	0.4	566	0.7
ヨーロッパ	6,996	8.6	11,856	14.6	18,852	23.2
その他	303	0.4	245	0.3	548	0.7
計	31,798	39.2	49,421	60.8	81,219	100

出所：(独) 日本学生支援機構より筆者作成

男を見ると、アジアが最も多く、次いで北米、ヨーロッパとなっている。一方で女では、北米が最も多く留学をする 5 人に 1 人が北米であると読み取れる。次いで、アジア、ヨーロッパとなっている。また、大洋州では女が男の約 2 倍の留学生数を示している。

全体の留学生数の男女比で見ると、男が 35% であり女性が 65% と大きな割合を占めている。現代の留学では、男性よりも女性がより留学をしており、その理由としては、男性の方が安定した立場へいち早く立つことを意識している者が多いこと、そもそも人文科学部など留学の多い学部に女性の割合が多いことなどが考えられる。

図 2-8 日本人留学生の男女比



出所：ラストリゾート

## 2-6 小括

この章では、様々な面から日本人の留学を見てきた。メディアで言われているような、日本人の留学が減っている、というのは OECD 調査の海外高等教育機関に在籍する留学等のデータから出たものだと考えられる。実際のところ、日本人の海外留学は増えてきていると言えるだろう。しかし、その留学は時代とともに多様化しその姿を変えてきていると言える。大学や大学院の丸々を海外で過ごすこと学生は少なくなり、国内と海外の大学間協定が年々増加していることや留学エージェントの参入によって、短期間にまた安価に留学というものが実現できるようになったと考えられる。

アメリカのトップスクールへの MBA 留学からアジアへの 1 ヶ月未満の短期留学など、留学の変容を見てきた。次章では、その変容の背景について考察、記述していく。

### 第3章 留学の変容を社会的背景から見る

#### 3-1 序節

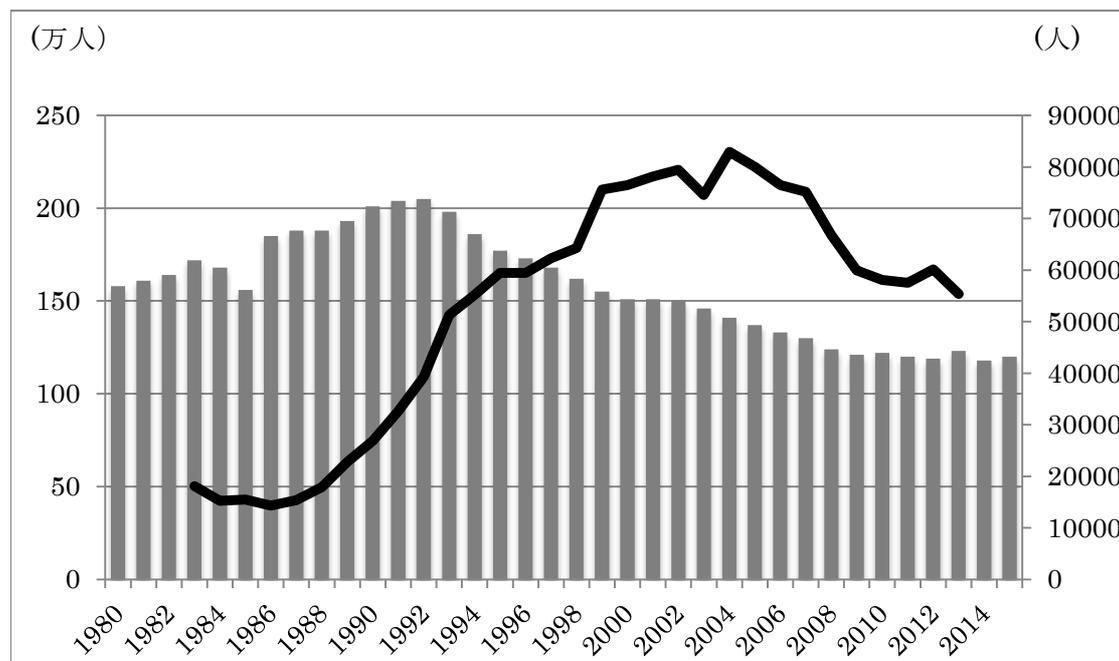
前章では、日本人の海外留学が多様化、短期化しているという留学の変容について記述してきた。また、海外の高等教育機関への留学は減少傾向にあることも記述した。そこでなぜ、そういった留学が変化していったのか、について考察していきたい。

日本の若者は、海外への興味・関心がなくなり国内に留まろうとする「内向き化」しているという意見もよく耳にする。一方で、グローバル化が進む社会の中で、ますますグローバル人材の需要は高まり、企業の求める人材も多様化してきている。日本に溢れる外国人留学生と対抗し、求められる人材に応えるために、日本の若者はどのような現実にあり、どのようなことを考えているのだろうか。

#### 3-2 少子化との相関

海外留学生数の減少について、そもそも少子化で若者の数が大きく減少したことが要因である、との見方がある。そこで、高校卒業の年齢である18歳の人口推移と、第2章1節でも用いた海外の大学や大学院等の高等教育機関で学ぶ日本人学生数の推移を重ねた図を作成した。

図3-1 18歳人口と日本人海外留学生数の推移



出所：総務省統計局、OECDより筆者作成

18歳人口は、1992年にピークを迎え205万人であったが、その後は減少を続け2009年に121万人まで減り、その後は停滞を続けて2015年には120万人である。1992年のピーク時と比較すると、約42%減少しているということであり、少子化が顕著に現れている。一方で、日本人の海外留学生数は2004年にピークを迎えそこから減少している。減少率は、約34%である。18歳人口の減少率が、海外留学生数の減少率よりも大きいことがわかる。

日本の大学進学年齢層は、18歳から20歳であり、海外留学は20歳から30歳と幅が広い。国内大学を卒業後に海外の高等教育機関へ留学するケースを考えた場合、上記の図内の海外留学生数は4年程、左にずらして考えることができる。その場合、若干ではあるが、両者の相関関係は高いと言えるだろう。

これらのことから、少子化が海外留学生数の減少の主たる要因とは言えないが、少なからず起因していると考えられる。

### 3-3 国内環境との相関

海外留学生数が減少傾向にあるのは、受け入れ国であるアメリカなどの変化によるものであるという一方で、国内の若者を取り巻く環境そのものが大きく変化していることが要因であるという見方がある。実際、スマートフォンの普及や日本の外国人留学生の増加、観光客の増加など私自身の生活の中でも様々なグローバル化を感じることができる。一橋大学国際教育センター教授の太田浩氏が日本人の留学生の動向に関する考察を基に、ここでは、そういった若者が立っている現状に焦点を当てて考察していく。

#### 3-3-1 学生の海外留学を評価しない雇用主

日本の社会自体が、海外留学によって得た知見や経験を生かすことを重要であると認識していないままでは、海外留学の推進は意味を持たない。実際に、現在の日本企業は新卒一括採用システムを重視しており、海外留学経験に対する評価は曖昧で海外留学をした学生が適切に処遇されているとは言い難い。さらに極端な言い方をすれば、休学しスキルアップのために海外で経験したことは、資格などの何かしらの形に残さなければ「遊び」や「自由」で時間を無駄にしたと考える雇用主も少なくはない。留学が多様化していることを認識しておらず、そもそも、企業が留学経験のある日本人学生の受け入れに積極的ではないことを示す調査結果もある。留学によって得た経験が制度的に評価されているとは言えない。政府が進めるグローバル人材の育成と、実際の企業による採用現場とのギャップは大きいと言える。

### 3-3-2 就職活動の早期化と長期化

採用時期の早期化傾向は、1952年の就職協定制定後にも存在していた。しかし、1997年の協定廃止をきっかけに、企業の青田買い合戦に拍車がかかるようになり、就職活動の早期化が顕著に現れている。また、不況により就職活動は長期化もしており、数十、数百社受けてやっと内定をもらったというケースも珍しくない。

日本型経営の特徴である、新卒一括採用方式は企業にとってはコストカットなどのメリットがあるが、大学教育や学生のキャリア形成に対して悪影響をもたらしていると言える。優秀な人材を確保するために行っていることが、かえって未来ある若者のキャリア形成の機会を奪うことになっていると考えられる。

図 3-2 就活スケジュール早見表

月	学校行事	イン ター ン シ ッ プ	自 己 分 析	業 界 研 究	業 研 究 職 種 ・ 企 業	エ ン ト リ 会	企 業 説 明	ES ・ 試 験 ・ 面 接	内 々 定
6月	定期考査	サ マ ー							
7月									
8月									
9月									
10月	定期考査	ウ イ ン タ ー							
11月									
12月									
1月									
2月	定期考査								
3月									
4月									
5月									
6月	定期考査						ES 		
7月									
8月									
9月									
10月	定期考査						試験 		
11月									

出所：マイナビ HP より筆者作成

ES以降の選考期間が短期決戦となり、準備不足の学生は例年以上に内定獲得が難しくなると予想されている。大学3年次の12月から企業の採用情報が、公開され4年次の4月から採用選考活動が始まる、という現在の早く、長い就職活動の仕組みは、在学中の交換留学や1ヶ月程度の海外研修でも学生にとっては抵抗感がある。留学経験を経て、キャリア形成をするよりも資格取得のための勉強や公務員試験対策をする方が現実的であるという判断を取る傾向にあるという。若者は、留学によって、就職活動が非常に困難な状況へと陥らせることを予感している。留学が学生時代における活動の選択肢に入らなくなっている(太田, 2014)。

### 3-3-3 インターネットの普及による影響

ここ数年、インターネットの普及率の上昇に始まり、スマートフォンの普及、それに伴ってSNS利用率も急激に増加している。さらには、最近ではVR(Virtual Reality)と言われる、ヘッドセットを装着することで360°見渡すことのできる仮想現実での疑似体験も可能になっている。また、高度な翻訳機能を兼ね備えたアプリケーションなどにより海外とのコミュニケーション、通信が容易になってきたことは間違いない。小さな頃から、そういった海外が身近に感じるこ

図 3-3 PlayStation VR



出所：PlayStation.com

とのできる現代の若者は、かえって「未知の世界」であったはずのもの、外の世界への憧れが薄れてきてしまっているのではないだろうか。そういった、便利すぎる世の中に生まれた若者であるからこそ、海外や新しい世界への挑戦をしなくなったということも考えられる。

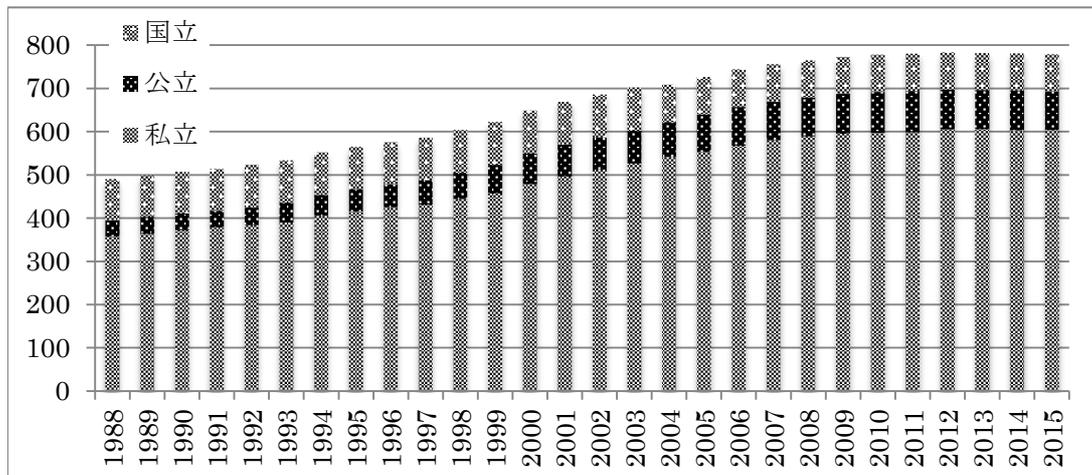
## 3-4 国内の大学に関する考察

ここでは、留学の変容に大きな影響を与えているであろう、国内の大学の存在、あり方に関して考察していく。

### 3-4-1 大学全入時代への突入

1991年、大学設置基準が大綱化され規制が大幅に緩和されたことで国内の大学数は増加した。高等教育機関である大学自体が市場原理によって淘汰される時代に入ったため、大学崩壊や大学のレジャーランド化が叫ばれるなか、高等教育機関としてのあり方、教育研究の新しいあり方をいかにして各大学が発展させ、学生の質・量を確保するかが問われているのである。

図 3-4 国内の4年制大学の推移



出所：文部科学省『学校基本調査』より筆者作成

日本の4年制大学数は、1988年の490校から年々増加し、2015年は779校にいたる。特に私立大学が著しく増加しており、1998年は357校だったのが、2015年には604校となり、実に247校が増えている。2013年の782校は、1992年比で49.5%も増加しているのである。大学進学率の上昇が大きく関係し、少子化で子どもの数が減少しているにもかかわらず大学数は増え続けた。2009年頃には、大学・短大の入学者数を志願者数で割った大学・短大の収容力は実に92.4%で、大学全入時代の到来と言われるようになった。

それなりに勉強し、入試難易度の高い大学にこだわらなければ、どこかの大学に入学できるような状況にあり、ひと昔前のような、海外に行っても大学に進学するという雰囲気はなくなっている（太田，2014）。また、「定員割れ」を起こす私立大学や専門学校も高い比率で存在し、私大の経営難も珍しくはない。2009年頃からは、新設大学数は減少傾向にあり、今後、大学数は横ばいもしくは減少に転じてくると想定されている。

ここで、日本の海外留学の動向を東アジアの近隣諸国と比較をしてみる。2011年、日本の海外留学生数は、57,501人であった。それに対して、韓国は人口が日本の半分弱であるにもかかわらず、留学生数は262,465人であった。単純に、4.6倍であり、人口比を考慮すると11.7倍である。台湾は人口が日本の5分の1程度であるが、2012年と13年のアメリカへの留学生数は多かった。少子化という点で着目すると、2011年の合計特殊出生率は韓国が1.24、台湾は1.07と日本の1.39よりも低い。また、高等教育進学率についても韓国の71%や台湾の73%で、日本の78%と同程度である。これらのことから、海外留学者数の減少を少子化と国内に置ける高等教育の機会拡大だけで説明しようとする、国際的な学生流動化の世界的な高まりという潮流に対する日本の遅れがかえって明確になる（太田，2014）。

### 3-4-2 単位互換（認定）制度の未整備と学事歴の違い

1972年に制度化された単位互換制度とは、協定の結ばれた他校での履修を認め、それを単位として認定するものである。海外留学においては、交換留学や短期留学を通して、海外の大学で習得した単位が、国内の大学では認定がされにくいという問題である。文部科学省の調査によると、2011年に国外の大学との交流協定に基づく単位互換制度を導入している大学は、全体の44%である。しかし、制度化されていても、海外の大学と単位の積算方法、授業時間数、評価基準が異なるなどの理由で、結果的に認定単位が少なくなるということがある。さらに、学生の立場からすると自大学で開講されていない科目であるからこその理由で、留学によって履修したものが、同じ科目がないからという理由で単位認定されないということもある。特に、国立大学は留学制度の歴史が浅いことから、私立大学よりも、単位認定の審査や手続きに柔軟性がないことが指摘されている。

このような、海外留学の成果が国内の大学で積極的に評価されていないという問題は、4年間で卒業したいという学生とその親の目にハイリスクに映る（太田，2014）。

また、日本と諸外国での学事歴の違いによる要因が指摘されている。

表 3-1 諸外国の学事歴の状況

国名	学年	国名	学年
アメリカ	9月～6月	オーストラリア	1月～12月
イギリス	9月～7月	カナダ	9月～6月
フランス	9月～7月	メキシコ	9月～7月
ドイツ	8月～7月	ブラジル	3月～12月
イタリア	9月～6月	インド	4月～3月
デンマーク	8月～6月	中国	9月～7月
ロシア	9月～6月	韓国	3月～2月

出所：UNESCO Statistical YearBook1998

欧米だけでなく、アジア諸国でも数週間の語学留学であるサマー・プログラムを行なうところが増えてきているが、6月から7月にかけて開催されるものが多く、学期中と重なるため日本の学生が参加できないことがある。諸外国に合わせて、日本の学事歴を改革するなどの柔軟な検討、対応が求められている。

### 3-4-3 大学での国際教育交流プログラム開発の遅れ

グローバル化していく社会に反して、日本の大学は諸外国に比べて国際教育交流プログ

ラムが遅れていると言われている。学生の様々な機会を設けるべき大学が、学生の関心を海外留学や研修に向ける努力が欠けていると言わざるを得ない（太田，2014）。

明治大学特任教授の小林明氏は、交換留学を代表とする伝統的なプログラムが、以下の理由から学生の動機付けを困難にしているという。

- (1)国際教育の大衆化の必要性に対する認識不足
- (2)脱却できないエリート留学生像
- (3)変化している学生需要への対応不足

究極的には世界の異なる国家・国民の間に平和な国際社会を実現するための手段の一つであり、全ての段階及び携帯の教育に適用されるべきである国際教育を大学が先導的に行う役割を担っており、「行きたくない」学生を「行きたく」させる責任が今日の大学にある。日本の大学が提供する留学制度とプログラムの画一性を指摘しているのである。

また、大学提供のプログラムに参加できるのは、高いGPAや英語力、人格円満で成績優秀な「エリート」と言われる学生であることを求められている。これは、遣隋使や遣唐使などの国策留学の名残によるものだとされている。大学は留学後の期待と成果を求めるが、今日の留学は多様化しており、希望すれば誰しもが実現できるものであるべきである。

大学関係者の多くが留学の認識を、自大学で学ぶことのできない分野を学ぶための機会であるなど、教室内にとどまった授業であると認識しており、その認識によって画一的な留学プログラムを提供し続けている。小林は、そんな正規課程以外のインターンシップやボランティア、フィールド調査などの教室外での活動へのプログラムの導入が遅れていると指摘している。海外ボランティア活動者数の増加など、学生の需要は環境保護や教育支援など多様化していることに対しての大学の理解が進んでいないのである。

学生の動機付けなど、留学プログラムの多様化や量的拡大に大学が、様々な留学プログラムを支援・提供する第三者機関との連携の強化が求められている。

### 3-5 経済問題に関する考察

アメリカへの留学の減少、留学の多様化の背景として経済問題が要因であるとの見方がある。諸外国での留学費用の高騰だけでなく日本国内の若者を取り巻く経済問題について考察していく。

#### 3-5-1 高騰するアメリカの学費

ここ数年、アメリカの大学での学費は急激に上昇している。また、授業料だけでなく食費や宿泊費などの費用も増加している。これらが理由で、日本人の海外留学生数、特にアメリカへの留学生数が減少傾向にあると考えることができる。

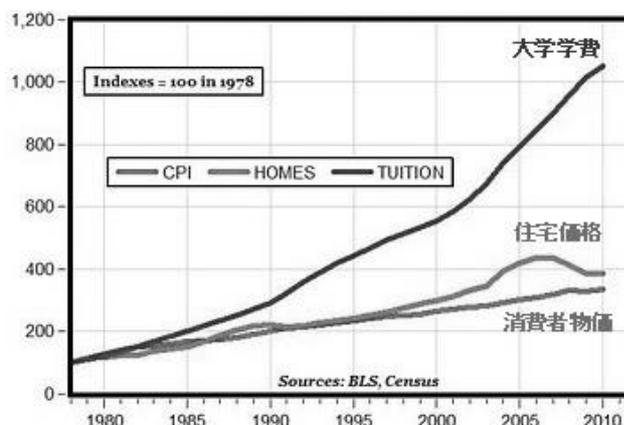
左のグラフは、1978 年を 100 とした消費者物価(CPI)と住宅価格、大学学費の推移を表している。学費の高騰は、顕著である。

留学期間を 9 ヶ月とすると、かかる諸費用は、2011～2012 年度が公立の 4 年制大学で 3 万 3973 ドルであり、これは 3 年前に比べて 16% も上昇している。

リーマンショック以降、大学の基金が目減りしていることが影響し、学生が負担する学費は年々

高騰し、公立で年間 100 万円以上、私立であれば 300 万～400 万以上かかってくることになる。名門大学ほど高くなる傾向があり、学生の 6 割が返済義務のある奨学金やローンを抱えているという。

図 3-5 米国での価格の推移



出所：アメリカ経済 Blog

表 3-2 英語圏の留学費用年間比較試算

大学 (国)	学費	滞在費	合計
カリフォルニア大学 ロサンゼルス校 (米国)	US\$ 36,888	US\$ 14,208	約 518 万円 (US\$1=101 円)
マギル大学 (カナダ)	CA\$ 14,891	CA\$ 13,042	約 265 万円 (CA\$1=95 円)
ケンブリッジ大学 (英国)	£ 13,011	£ 5,520	約 320 万円 (£1=172 円)
オーストラリア国立大学 (オーストラリア)	AU\$ 23,568	AU\$ 13,034	約 350 万円 (AU\$1=95 円)
オタゴ大学 (ニュージーランド)	NZ\$ 21,000	NZ\$ 12,569	約 300 万円 (NZ\$1=89 円)

出所：ウェブマガジン「留学交流」

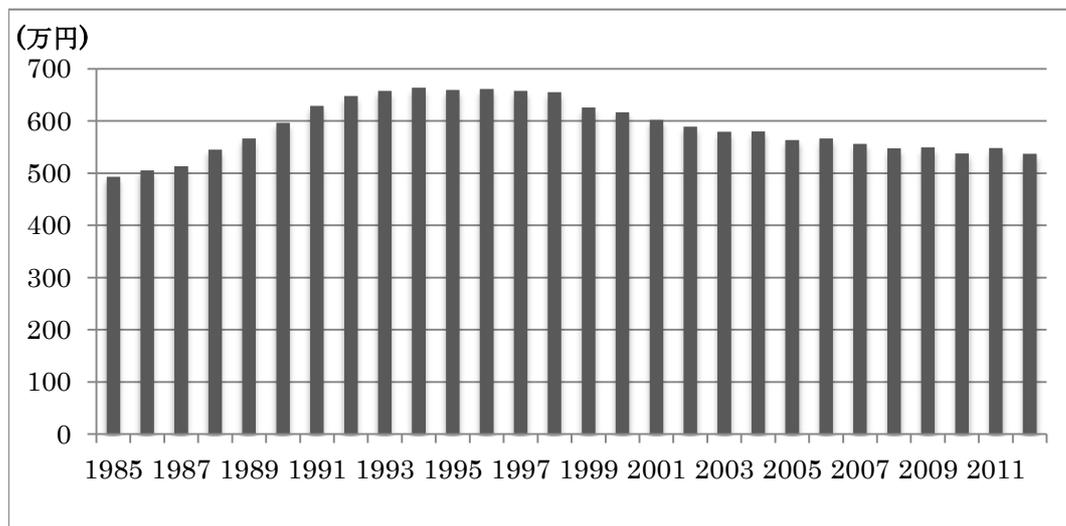
上表を見ると、アメリカでの留学費用がいかに高いかが読み取れる。一般家庭にとってアメリカの学士過程に 4 年間留学させることはとても困難になっている。また、社会人が退職して大学院に進学することを考えた場合でも、個人でこのような高額な留学の経費を工面することは非常に難しいのが現実である。

こうした、アメリカの大学の学費高騰を背景にアメリカでの留学生の減少が起こっていると考えられる。

### 3-5-2 家計の悪化による影響

上述のように高騰する留学費用に対して、日本経済の長期停滞によって家計が悪化していることが、海外留学の減少の要因であるとも考えられる。

図 3-6 1 世帯当たりの平均所得金額の推移



出所：厚生労働省『国民生活基本調査』より筆者作成

厚生労働省の調査によると、1 世帯当たりの平均所得金額は、1994 年の 664 万円をピークに減少傾向にあり、2012 年は 537 万円である。これは、約 20% の減少である。

ベネッセ教育開発研究所が実施した留学に関するアンケート調査において、留学経験者が留学の決断で阻害要因と感じたこと、留学未経験者の留学を断念した理由として、共に「留学にかかる費用が高く負担がかかった」との回答が最も多かった。留学未経験者だけを見ると、実に 68% の割合を占めている。また、英語教員責任者に対して実施した「大学における英語教育の改革等に関する調査」(2009)においても、留学生の送り出し課題として「経済的な問題で留学を諦める学生がいる」との回答が全体で 59.7%、国立大学においては 72.1% にも上った。

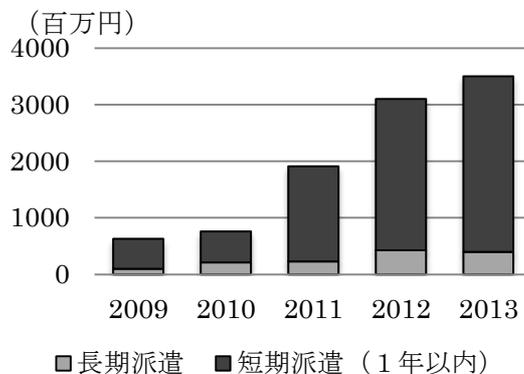
こうした、日本の家計の悪化が留学を考える学生にとって大きな障害になり、結果的に海外留学生数の減少に繋がっていると考えられる。

### 3-5-3 増加する交換留学

海外留学生数の減少傾向には反して、大学間協定などによる交換留学は増加している。第 2 章 1 節の図より、2014 年の協定に基づく留学及び基づかない留学生数は 2009 年と比べて 2 倍以上に増加している。また、1 ヶ月以内の短期留学が特に顕著に増加していることがわかる。

右図より、日本人に対する政府による奨学金の予算額は大きく増加している。特に、1年以内の短期派遣に対するの奨学金予算額は顕著である。しかし、奨学金を得るためのハードルは高い上に、返済しなければならない奨学金がほとんどで、留学のための資金を工面することが非常に困難になっている。そんな中で、比較的費用のかからない、交換留学が増加しており期間も短期化しているのである。

図 3-7 政府による日本人の海外留学に関する奨学金予算額の推移

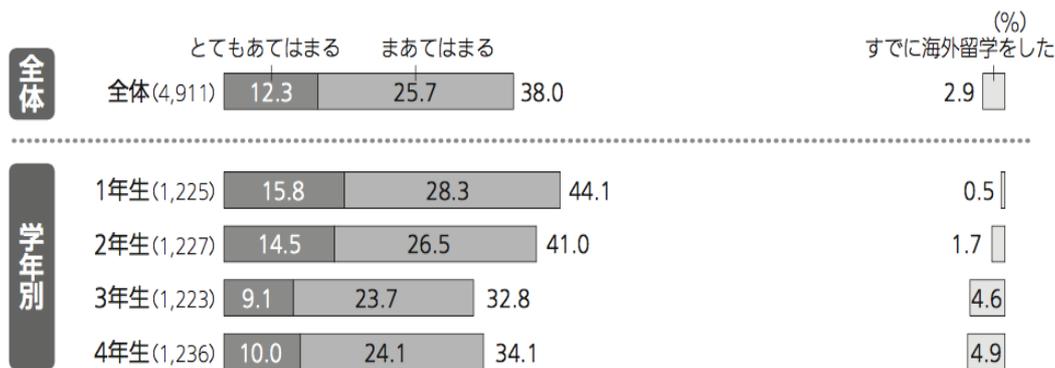


出所：留学交流より筆者作成

### 3-6 日本人の内向き志向に関する考察

日本人の海外留学が減少したのは、若者の意識の変化だという見方がある。いわゆる「ゆとり」と呼ばれる世代が、今日の海外留学生の大半を占めている。そんな若者が海外留学をしたいと思わない、海外への興味関心がない、などの内向き志向が要因であると考えられている。しかし、実際には海外留学は多様化し量的には増加傾向にある。

図 3-8 在学中の海外留学の意向 (全体・学年別)



出所：Benesse 教育総合研究所『大学生の学習・生活実態調査報告書』(2012)

大学院も含んだ在学中に「海外留学をしたい」と思っている学生の割合は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせると、全体の 38%であり、「すでに海外留学をした」を合わせると、4割の学生が海外留学を肯定的に捉えていることがわかる。また、学年別で見ると1年生が最も高く 44.1%が留学したいと回答している。一方で、4年生の「すでに海外留学をした」との回答は 4.9%にとどまっている。このことから、留学意向者の割合と

比較するととても少ない。留学をしたいと思っけていても、いざ実行に移すのが容易ではないということが考えられる。

協定に基づく留学生数の増加や意向調査の結果からは、日本人の若者の意識はむしろ海外志向に向かっていると考えることができる。

### 3-6-1 求められる高度な語学力

日本人学生が海外留学に関して感じている阻害要因として、語学力の不安がある。語学力を身に付けたいという理由から、海外留学を考える者はとても多い。しかし、実際に海外に行って生活することが不可欠なため、ある程度の語学力が必要である。実際に、英語が全く話せないというが飛び込みで留学に来たという者にも出会った。一方で、語学力の問題や学校生活の不一致を理由に海外で引きこもるといった者にも出会った。通常、多くの者はできるだけ渡航前に不安要素を取り除いてから海外留学に臨みたいと考えるだろう。

日本人は、文法問題が得意であるとされており「聞く」「話す」などの一般的なコミュニケーションに必要な能力が低いとされる。世界的な非母語話者の英語力向上によって、受け入れる側の英語能力のハードルも高くなってきている。一定のレベルで英語が話すことができないというのは、留学を決断するのに大きな障害となっているのは間違いない。こうした留学へのきっかけとしても、日本の英語教育を根本的に見直す必要がある。

### 3-6-2 コンフォート・ゾーンへの滞留

日本は経済成長を果たし、情報とモノで溢れた便利で住みやすい社会になっている。太田（2014）は、その結果として皮肉なことに若者がそのコンフォート・ゾーンから飛び出して敢えて海外の異なった環境の下で多種多様な習慣や文化をもつ人々に揉まれ、渡り合いながら、自分の力で状況を切り開いていくような苦勞をすることに価値を見出せなくなっているという。

感染症や多発するテロ、自然災害、地域紛争など様々な影響からリスクマネジメントが問われている。その中でそういったリスクから回避する安全志向が若者の中で強くなっていることも事実である。また、就職活動など進路に関するリスクからも回避する傾向が強くなっている。これらは、留学を決断する若者自身だけでなく、彼らを送り出す保護者や教育現場の指導者も同じことである。少子化の影響で親が過保護になり、「子離れしない親」、「親離れしない子」の関係が強まることで、「かわいい子には旅をさせよ」というのは過去のものとなってしまっているという。

身近な環境や人間関係など手の届く範囲での幸せに満足し、ぬるま湯的な感覚のままにいる時こそ、慣れ親しんだ場所から新しい分野や未知の世界に飛び出すことで、感じられ

る不便さや難しさを体験することが重要である（太田，2014）。

### 3-6-3 内向き化と二極化

太田は、日本人の海外留学において若者の意識の「二極化」していると述べている。それは、海外志向の強い層と弱い層である。最近では、海外留学生数や海外旅行者数の減少の原因として、若者の意識が内向き化しているという心理的な要因であると考えられている。しかし、それらは社会的、経済的、政治的な状況の変化であるという見方が軽視されがちである。

実際に、経済的に負担の少ない交換留学や海外ボランティア、ワーキング・ホリデーなどは増加傾向にあり若者の海外志向は形を変えながら強くなっていると考えられる。一方で、リスク回避や安全志向など内向き化している若者も一定数以上、存在することも確かである。こうした、若者の意識の二極化が起こっているのである。

### 3-7 小括

単位取得を目指した、海外留学は減少傾向にあり、特にアメリカへの留学が減少しているのは、経済的な問題や国内の環境の変化が要因である。また、就職活動との関連やキャリア形成のための手段として留学の意義について考えた時、学生も慎重になっているのは確かである。

経済的、社会的なリスクを考えた時に若者が選択するものとして、短期留学や海外インターンシップ、海外ボランティアが増加傾向にある。グローバル人材として、強く、実践力の高い学生を求める企業側のニーズに応えるべく、学生は必死で考え選択しているのである。そういった背景で、留学のスタイルの多様化が起こっているのであると考えられる。

海外という、自分の知らなかった未知の世界に敢えて身を投じることによって自国の素晴らしさや常識を今一度、見つめ直す機会になるということが必要になっている。これは、1-1 で記述したルソーによる「留学論」に基づいた考え方と一致しているのである。

## 第4章 まとめ

第1部では、留学の起源から始まり留学の変容について述べてきた。

第1章では、留学の概念からルソーによる『エミール』の中の「留学論」について取り上げた。本を読むことは、知識を得ることの一方で、全てを知ったように感じてしまうものであり、実際に海外という自身の知らない世界に行ってみなければ、その国の者を知ったことにはならないとわかった。次いで、日本での海外留学の歴史について触れた。大陸での仏教に関する渡航から始まり、国交のため、発展途上であった医学のため、英語教育のためなどの国策留学が主流であった。明治期頃から、官費留学の制度化、私費留学が増加した。戦後は、円高傾向などにより一般にも海外留学が身近なものとなったことで、その目的や動機も多様化してきたことがわかった。そこで、語学力の向上と専門知識の習得と大きな2つの動機に分けて、現代の留学について触れた。

第2章では、日本人の海外留学の変容と特徴を様々な統計とともに見ていった。日本人の単位取得を目指した留学は減少傾向にあり、特にアメリカへの留学が顕著に減少していることがわかった。一方で、アジアへの留学や短期交換留学が大きく増加していることがわかった。留学といえばアメリカ、というバブル期の常識が変わり、留学先の多様化とともに短期化していることがわかった。次に、先行分野別での留學生数の割合について取り上げた。明治期では、医学留学なども多かったが、現在ではほとんどの学生が文系で、さらに語学力向上などを目的にした留学であることがわかった。男女比でも、明治期などは海外へ渡ったほとんどは男性であったが、現在は約3分の2が女性であるなど、留学する者、留学先、留学形態など留学の変容がわかった。

第3章では、前章の留学の変容に関して、社会的背景から考察を進めた。最近の論調としては、日本の若者が海外への興味がなくなったなどの、内向き志向が要因であるとの見方がある。そこで、はじめに少子化という留学する世代の絶対数が減少しているからではないかと考えた。留学する世代と留學生数の推移の相関はそこまで高くはないものの、少なからず要因であると論じた。次に、国内の環境との相関について触れた。グローバル化する社会の中で、留学を評価しない雇用主や就職活動の早期化・長期化による要因を論じた。加えて、国内の高等教育機関の拡大も1つの要因であると考えた。そして、最も大きな留学の阻害要因であったのが経済的問題であった。高騰する海外の学費だけではなく、日本国内の家計の悪化によって、留学したくてもできない学生が一定数いるということがわかった。また、給付型奨学金の拡充や日本人の語学力向上について検討する必要があると考えた。最後に、現代の若者の意識について論じた。太田氏の見解を元に、便利で快適な日本という国が若者にとって居心地の良いものになりすぎてしまい、海外という新しい

世界に身を投じることを避ける内向き志向の若者がいること。一方で、将来的なキャリア形成を目指して、たとえそれが遠回りになったとしても留学などの選択肢を選ぶ海外志向の若者がいること。現代の若者は、それらに二極化しているということがわかった。

## 第Ⅱ部

現代の若者のライフコースに関する考察

## 第1章 現代の若者の意識

### 1-1 若者を取り巻く社会

急速な人口減少社会へと移行する日本では、生産年齢人口の高齢化とこれからの社会保障の支え手の減少が問題になっている。また、長引く厳しい経済雇用情勢がある。1990年代に入ると、バブル崩壊によって状況は一変し日本経済は「失われた20年」と呼ばれるように長期間にわたって低迷する。さらには、2008年のリーマンショックにより「100年に1度」と言われるほどの景気後退に陥り、世界経済全体が急速に悪化した。その後、回復の兆しが見え始めた頃、2011年3月11日に発生した東日本大震災によって再び落ち込んだ。その後は、景気は緩やかに回復傾向にある。長期失業率の増加に加えて、非正規雇用も増加している。非正規雇用は、正規雇用 비해、不安定、低賃金、能力開発の機会の乏しさなど様々な課題がある。

国際的な経済競争の激化に加えて、経済のグローバル化、日本国内の高学歴化とネットワーク社会の進展が著しい。インターネットの普及により、コミュニケーション行動にも変化が現れている。ここ最近、ブログやSNSなどのソーシャルメディアの普及によって、若者を中心に、コミュニケーション行動が多様化している。意思や情報の伝え方に関しても、言葉よりも絵や映像での自己表現をするような感覚の伝達や共感を重視している傾向があると考えられる。

### 1-2 現代の若者の特徴

上述した、変化をしながら様々な問題を取り巻く社会の中で、現代の若者はどのような特徴で考えを持っているのかについて、ここでは取り上げていきたい。

#### 1-2-1 若者の仕事観

かつて日本の社会は、年功序列が一般的で経験値が仕事においては重視されていたため、年配者が優位にあった。しかし、現代は急速な社会変化の中で若者の力が重要視されてきている。「ゆとり世代」の若者たちは、今まで無駄とっていたことでも言い出せなかったようなことを平気で無駄だと言える若者が増えているという。

新卒の就職環境は依然として厳しい。そんな中で、若者にとって「シューカツ」は、人生においてとても重要なイベントになっているのである。2012年に発刊された、史上初の平成生まれの直木賞受賞作家、朝井リョウによる『何者』がある。2016年に映画化もされ、こうした現代の就職活動を題材にした作品である。『何者』は、大学生5人が就職活動の情報交換をきっかけに集まり、就活に臨む物語である。海外ボランティアの経験やサークル

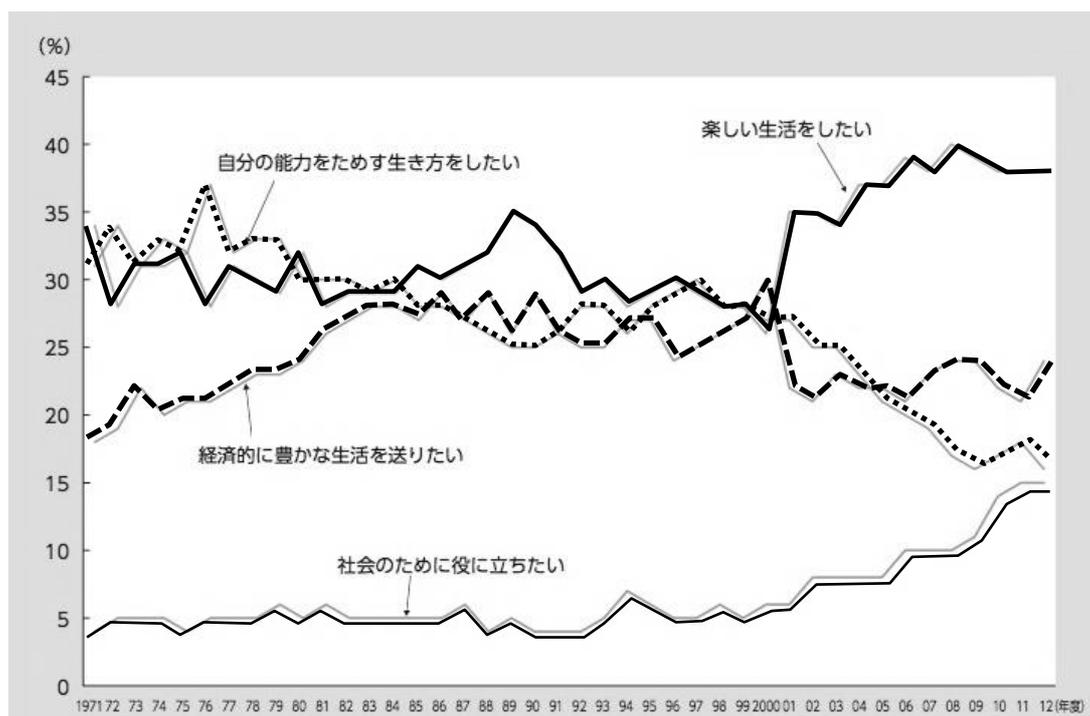
活動、手作り名刺などのさまざまなツールを駆使して就活に臨み、それぞれの思いや悩みをSNSに吐き出しながら就活に励む。SNSや面接で発する言葉の奥に見え隠れする本音や自意識が、それぞれの抱く思いを複雑に交錯し、人間関係は徐々に変化していく。やがて内定をもらった「裏切り者」が現れたとき、これまで抑えられていた妬みや本音が露になり、ようやく彼らは自分を見つめ直す。就職活動という、子供から大人に、モラトリアム時期を終えて社会において「何者」かになるろうとする、大学生の「特別」な時期における揺れ動く心を、現代のリアルな就活事情を反映させて描いたものである。

図 1-1 映画「何者」



出所：「何者」公式サイト

図 1-2 若者の「働く目的」の推移



出所：厚生労働白書（2013）

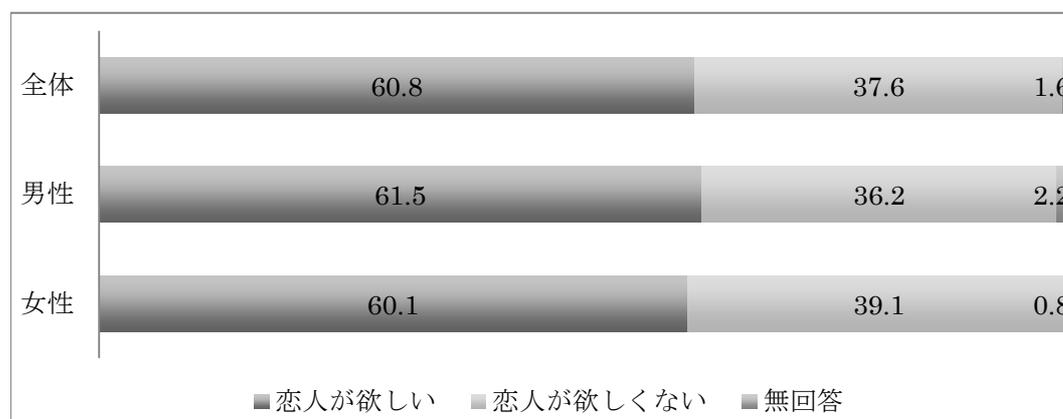
若者にとっての働く目的は、2000年以降「楽しい生活をしたい」との割合が大きく増加している。一方で、「経済的に豊かな生活を送りたい」との割合は減少傾向にある。最近の若者は、経済的豊かさよりも、自分が楽しく生活できるかという心情的豊かさを求めていることがわかる。また注目すべき点は、長期間低い割合にあった「社会のために役に立ちたい」の割合は、2000年代から増加傾向にある。

現代の若者の仕事観は、就職活動や社会人としての様々な不安を抱えながらも、「幸せになりたい」という願望や自己実現や社会貢献への欲求が高いことがわかる。

### 1-2-2 若者の恋愛観

今日、男性の「草食化」や若者の恋愛離れが叫ばれている。2016年のNHK調査によると、20代独身男女を対象に交際相手がいるとの割合は、男性で22.3%、女性で33.7%であり2008年前の同調査の結果を大きく下回ったという。

図 1-3 恋人が欲しいですか（20代の未婚者及び現在恋人がいない者）



出所：マイナビニュース（2014～2015）

内閣府による「結婚・家族形成に関する意識調査」では、未婚者かつ現在恋人がいない者を対象にした調査で、「恋人が欲しい」との回答をした者の割合は6割にとどまった。男女差に大きな違いはないが、共に約4割が「恋人が欲しくない」と回答している。

恋愛しない若者には、次のようなものが理由の一部であると考えられる。1つ目は、超情報社会と行き過ぎたコミュニティ嗜好である。SNSの普及などにより、行動が全て可視化されていることで恋愛での嫉妬や嫌悪が生まれ、面倒だと感じてしまうのである。現代の若者にとって、恋愛は必需品ではなく嗜好品のひとつになってしまっているのである。2つ目は、男女平等社会と男女不平等社会である。若い女性の「歳の差恋愛・結婚」や「専業主婦」願望が高まっていることなど、男女間での恋愛格差の拡大がある。また、ただ異性と添い寝しあうだけの関係である「添い寝フレンド」という言葉も若者では広がっている。3つ目は、「親ラブ族」の急増である。親ラブ族とは、マーケティングライターの牛窪恵氏が親のことを好きな子どもを指して用いた用語である。SNSなどに疲れて、最後に信頼できるのは自分の親ということで、親との距離が縮まり、若者の自立が遅れているのである。最後は、リスク回避と長引く不況である。セクハラやデートDV、リベンジポルノなど様々な恋愛におけるリスクの回避と、服装や食事などの交際費の捻出ができない、したくない

といった理由である。現代の若者の恋愛観は、異性に興味がないというわけではないが「恋愛は面倒だからしない」という考えが増えているのである。

### 1-2-3 ネット社会の弊害 —メディアが及ぼす3つのC—

インターネットが普及し、昔よりも大きく情報量が増している。便利さの中で、ルソーによる「エミール」でもあったような狭い範囲のみを知ることによりそれが全てであるとの思い込みも発生してしまうことも確かである。国際基督教大学の佐々木輝美教授は、ネット社会が若者に与える弊害として「3C」をあげている。

#### (1)Contents : 内容の問題

メディアに接することで、そこに描かれている行為を学習し、状況によってその学習した行為を実行してしまうという観察学習効果である。また、繰り返し見ることで慣れてしまう脱感作<sup>1</sup>効果を、起こしやすいというものである。次に、誇張された世界を現実として受け入れてしまうこと、犯罪や危険行為を促進する情報提供であることなどがある。

最も若者に迫っている問題は、依存や中毒である。ゲームやSNSによって、睡眠不足やコミュニケーション不足など日常生活に支障をきたしたり、スマホ老眼や長時間持ち続けることで指の骨が変形するスマホ指になったりと様々な問題がある。

#### (2)Contact : 出会い、関わりの問題

情報提供機能と同時に通信機能を持つ、メディアは様々な形で互いに連絡を取り合うことが可能になった。そのことで、未成年が犯罪に巻き込まれたり悪意ある人との関わったりといった問題が、大人の目の届きにくいところで行われ、対応が遅れることがある。

#### (3)Commercialism : 商業主義の問題

身近に大量に溢れる広告への対応の問題である。個人でも広告が打たれ、客観性のかけた広告も存在する中で、それらの信頼性をどのように確保したら良いかなどの問題がある。

### 1-2-4 「さとり世代」

「さとり世代」とは、マーケティング・アナリストの原田曜平氏が2013年に出版した著書のタイトルであり、現代の若者の気質から用いた言葉である。現在の若者が、現実を悟っているように見えることが言葉の由来である。一般には、1990年代に生まれたいわゆる「ゆとり世代」の対象と概ね一致している。

一般的に「さとり世代」には次のような特徴が挙げられる。

- ・ 欲がない、熱がない

---

<sup>1</sup> 刺激に対する感情・感覚が鈍化すること

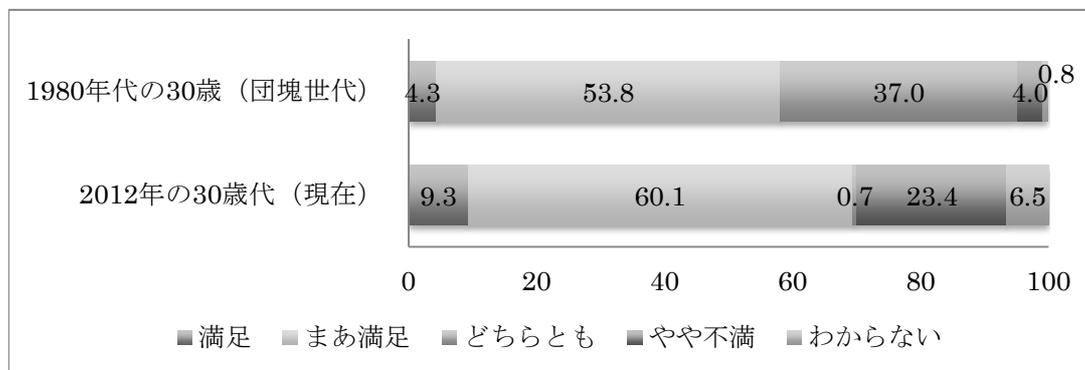
- ・ 休日は家でのおんびりと過ごす
- ・ 恋愛に興味がない、振り回されたくない
- ・ ブランドに興味がない、物は必要最低限
- ・ コストパフォーマンスを重視する
- ・ 面倒を避け、気の合わない人とは関わらない

これらの特徴を持つ若者は、ボランティア精神が強く、消費に執着しない傾向がある。これらを背景に、モノが溢れた社会で消費に重きを置いた社会から精神的な豊かさや幸福感を求める社会への移行期間であるとの見方もある。

### 1-3 現状に満足している若者

厚生労働省による「若者の意識に関する調査」(2013)によると 15～39 歳の若者の約 6 割が、現在の生活に満足しているとの結果であった。内閣府による「国民生活に関する世論調査」でも、20 歳代と 30 歳代のそれぞれ約 7 割が現在の生活に満足しており、40～50 歳代よりも割合が高いことがわかっている。また、同調査の結果を経年比較したものが次の図である。

図 1-4 現在の生活に対する満足度



出所：厚生労働白書 (2013)

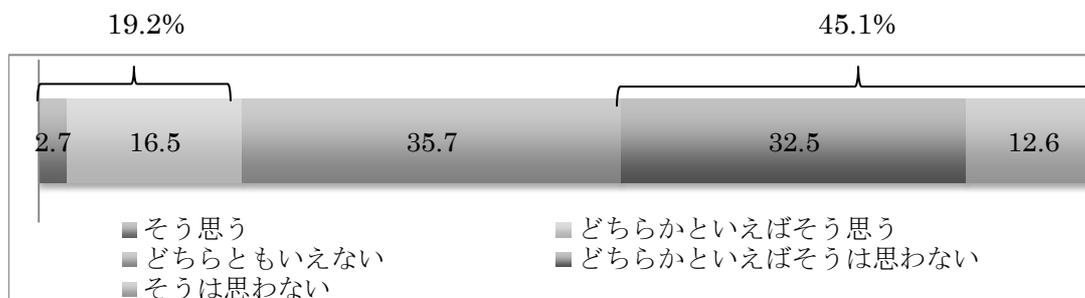
現在の 30 歳代は、団塊世代が 30 歳代であった頃の 1980 年よりも、概ね満足している者の割合が高いことがわかる。

社会学者の古市憲寿氏は、現状に満足している若者について、未来への不安が要因であると示している。人は「今が十分だ」と感じることで、幸福を感じるため、より良い未来を想像することができなくて、逆に現状で満足するしかないと考えするという。一方で、満足度が若者に比べて低い 40～50 代はバブル期などに、いい思いをしてきたからこそ、現在の生活が好景気に比べて不満に感じるのだという。それらのことから、年配者はそんな現状に満足している若者を嫌悪し、批判するのであるという。

#### 1-4 未来に不安を抱く若者

上述したように、現状に満足している若者は同時に未来への不安を抱いている。次の図は、厚生労働省による「若者の意識に関する調査」の結果である。

図 1-5 日本の未来は明るいかな



出所：厚生労働白書（2013）

日本の未来が明るいと思うかという質問に対して、「（どちらかといえば）そうは思わない」との回答が 45.1%で、「（どちらかといえば）そう思う」との回答の 19.2%を倍近く上回った。

表 1-1 日本の未来が暗いと考える理由（複数回答）

理由	割合 (%)
高齢化によって、財政が悪化し、医療や年金等の給付額が下がったり、税金や社会保険料等の負担額が上がったりして生活が苦しくなる	72.9
少子高齢化や新興国の台頭等によって、日本経済が停滞し、生活水準が下がる	60.9
景気低迷が続き、高い失業率や就職難が恒常化する	49.2
社会不安が増したり、治安が悪化したりする	29.5
都市への集中と地方の過疎化が進行する	28.2
グローバル化の進展等によって、格差が拡大する	24.8
新興国の追い上げや理系離れ等により、人材面で日本の国際的な地位が低下する	24.7
海外からの労働者等の流入が増え、従来の日本文化が崩壊する	20.4
情報通信の発達によって、情報やインターネットを使いこなせない人の生活の質が低下する	12.8
特にないが漠然と不安である	7.2
その他	6.4

出所：厚生労働白書（2013）より筆者作成

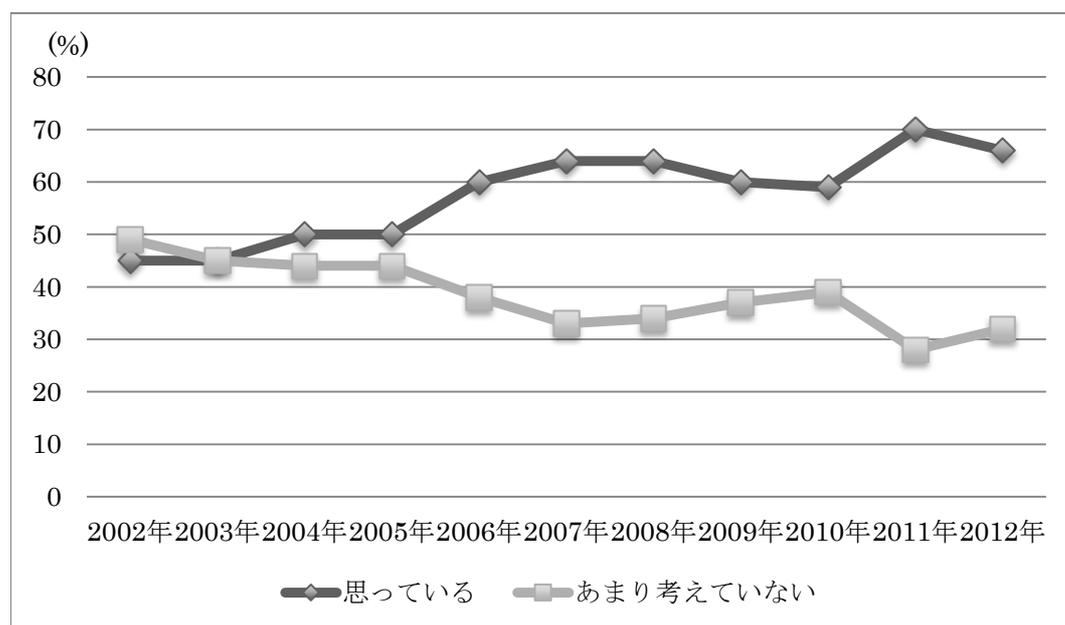
若者が、日本の未来が暗いと考える理由として、財政悪化や社会保障制度に対する不安

が 72.9%と最も多かった。ついで、経済不安、雇用不安が続いている。グローバル化や情報通信の発達など一見、便利でより良くなっていく社会に対しての不安を持っている若者も少なくない。

#### 1-4-1 未来を良くしようという意欲

「ゆとり世代」と批判されることが多い現代の若者であるが、そんな自分たちが生きていく日本の未来を良くしようという意欲はあるという。

図 1-6 20代の社会への貢献意識の推移



出所：内閣府「社会意識に関する世論調査」より筆者作成

社会の役に立ちたいと思っている若者は、増加傾向にあり 2004 年には半数と近年高い水準を示している。また、若者の社会貢献の意欲としては、次のようなものが挙げられる。

表 1-2 日本の未来を良くしようとする意欲（複数回答）

仕事や学業をしっかりとやることで社会に貢献したい	34.8%
社会的企業・ボランティアなどに参画して直接社会を良くしていきたい	11.7%
寄付やチャリティーなどを通じて社会に貢献していきたい	8.6%
考えてはいるが、具体的にどのようにすべきかわからない	33.2%
政府や他の人がどうにかしてくれることを期待しており、自分に何かできると考えたことはない	9.0%
どれもいえない	26.8%

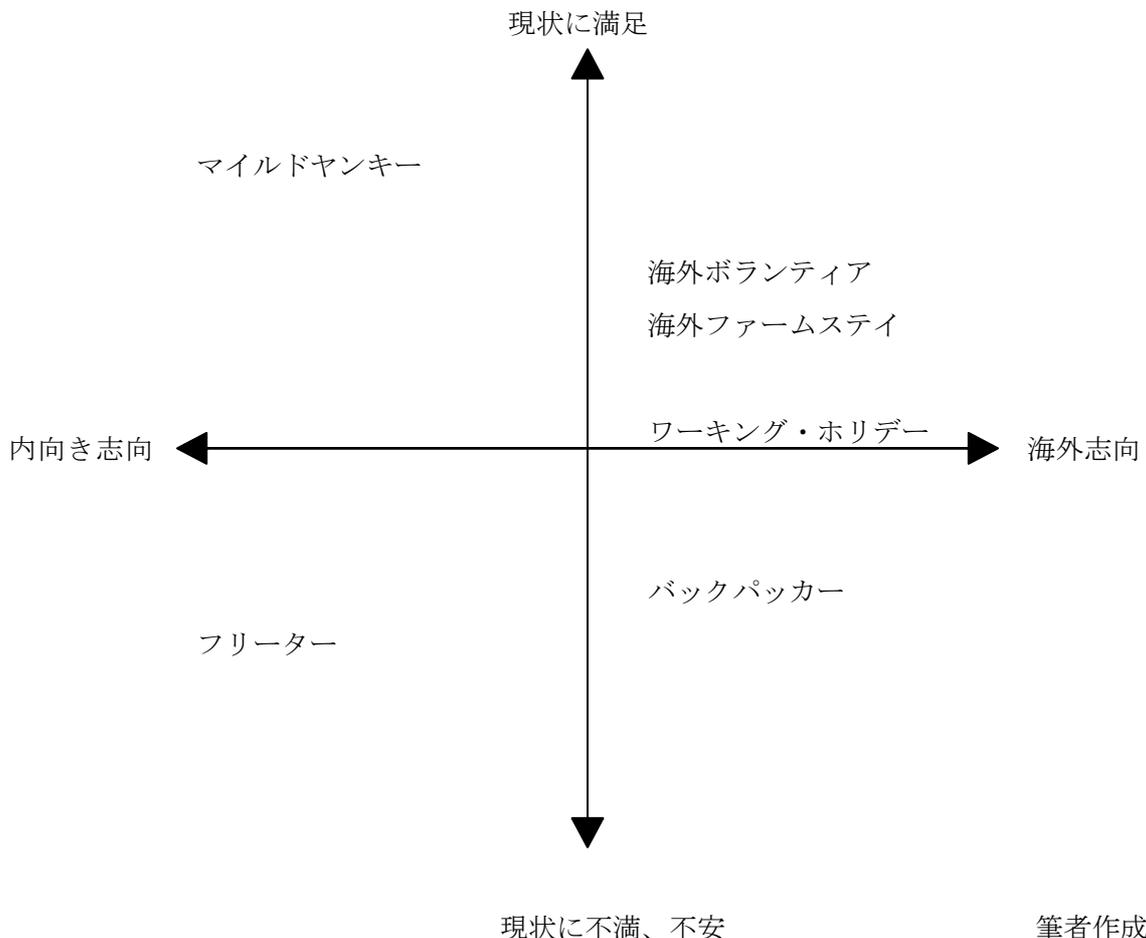
出所：厚生労働省「若者の意識に関する調査」（2013）より筆者作成

「仕事や学業を通じて貢献したい」との回答が 34.8%で最も多く、自分の置かれている環境の中で努力し、貢献することを望む者が多いことがわかる。ついで、ボランティアやチャリティーなど自分の生活にプラスアルファした活動での社会貢献を望んでいる。また、「貢献したいがどのようにすべきかわからない」と答えた人は 33.2%で、過半数以上の若者は、日本の未来のために何かしら行動をしようという意欲を持っていることがわかる。

### 1-5 若者のライフコースの分布

上述のような、若者を取り巻く環境の中で彼らはどのようなライフコースを選択するのか。バブル崩壊以後、戦後の日本社会にある種普遍的とも言われてきた「終身雇用制度」が崩壊し、多くの雇用リストラが行われる一方で、IT 関連をはじめとした新規事業領域での起業家の活躍などによって、いわゆる「勝ち組」「負け組」と呼ばれる社会の階層化が実感されるようになった。一般的な「ライフコース」の概念は大きく変わりつつある。そこで、ここでは若者の特徴的なライフコースの分布を見ていく。次に次章から詳しく触れていくことにする。

図 1-7 若者のライフコースの分布



## 1-6 夢を持ってない若者

若者を取り巻く社会で、若者が夢を持ってなくなったと言われている。それは、世の中が現実的になってきたことが原因ではないかと言われている。

まず、夢を持つだけの動機がなくなっている。高度経済成長期を経験せずに育ち、明るい日本を知らない若者は夢をイメージできないのである。また、現在はあらゆる場面で大量の情報を入手することができる。人は知らないものには、比較的ポジティブな想像をすることができるという。一方で、情報が多くクリアすぎる事柄に対して、人はリアルな想像、つまりネガティブな想像を働かせてしまうのである。

生まれた頃から、あらゆる情報の中で育ってきた若者はどうしても、リスクが見えすぎてしまい夢を持つことができなくなっているのである。今の若者の夢といえば、結婚して子どもを産み育てるという、以前までは「ふつうの生活」と言われるものになってしまったのかもしれない。

## 1-7 小括

現代の若者たちは、バブルの崩壊以降の好景気を知らずに育ったため、少子高齢化の日本経済が縮小していくことは理解しているため、社会や未来への期待値も低い。高級車に乗り、ブランド品を身につけ高級住宅街に住むことなどには多くの若者はほとんど興味がない。「就職して、結婚して、子どもを持つ」という普通に考えられていたことが、現代では困難を伴うものになってしまったのである。

そんな「ふつう」が若者にとって簡単に手に入らなくなっているのが現実である。アニメや漫画で描かれている、一軒家を持って家族を養う父親の姿でさえ、すごいと感じるようになってしまったのである。

受験や就職など、勝負を迫られる機会が増えている中で、避けて通ることのできない場面も存在する。選択肢の少なくなっていく現代社会で、希望している職場、仕事であっても何か一つを回避すれば、それ以外で困難や不便に耐えていかなければならないのである。

## 第2章 海外志向のライフコース

### 2-1 海外志向の若者

日本国内で「標準的ライフコース」が成立しなくなっている中で、現状に不満があったり、未来の社会に不安があったりという理由で海外志向の若者がいる。ここでは、グローバル化していく社会で、海外での就職や生活、経験などを重視し日本を旅立つ若者について考察していく。

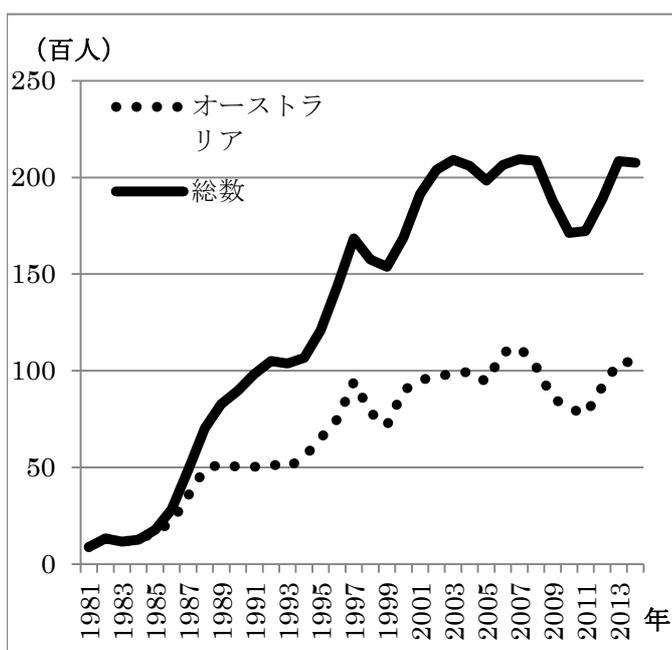
### 2-2 ワーキング・ホリデー

ワーキング・ホリデー制度とは、2国間または地域間の取り決めに基づいて、各々が相手国または地域の青少年に対して、休暇目的の入国及び滞在期間中における旅行や滞在資金を補うための付随的な就労を認める制度である。両国が、文化や一般的な生活様式を理解する機会を提供し、広い国際的視野を持った青少年の育成と両国間の相互理解と友好関係を深めることを目的としている。ワーキング・ホリデーは「旅をすること」に加えて、「学ぶ」、「働く」、「暮らす」という海外生活が中心の制度である。また、この査証はあくまでも観光が目的であるため就労や就学を第一目的とすることは禁じられている。

この制度は、青年（18歳～25歳または30歳）を対象にしており、原則として各相手国で1人につき1度しか利用することはできない。ここで、日本のワーキング・ホリデー制度の歴史と日本人への査証発給数の推移についてみていく。

日本は1980年のオーストラリアとの協定以降、年々協定国を増やしてはいるもののオーストラリアをはじめ、ニュージーランドやカナダの3カ国を中心に増加を続け、現在でも大半を占める。その理由としては、主要言語が英語でないこと以

図2-1 日本人へのワーキング・ホリデービザ発給数の推移



出所：Global ACE HP より筆者作成

外に、受け入れ国の姿勢や治安や環境などが考えられる。また、2008年のリーマンショックの影響で、発給数が一時的に減少したとともに、ワーキング・ホリデーを取得する人が海外で働きスキルアップを目的とする傾向に変化した。

### 2-2-1 若者にとっての「ワーホリ」

ワーキング・ホリデー制度の資格は、18歳から30歳とまさに若者だけに与えられた特権である。

海外志向の若者にとって「ワーホリ」とはどのようなものなのか。またどういった動機でワーキング・ホリデーを利用するのであろうか。

初めは、やはり語学力の向上である。「もっと生きた英語を学びたい」「もっと英語に触れたい」という気持ちからワーキング・ホリデーを選択する若者が多いようだ。では、なぜ私費留学ではなくワーキング・ホリデーなのか。一番の理由としては、経済的な問題である。私費留

学では、学費や滞在費などを工面するのに国内でアルバイトなどを掛け持ちしても困難な場合がある。一方で、ワーキング・ホリデーでは、ある程度の残高証明は必要なものの、諸費用を工面しながら、さらには貯金しながら勉強ができるという魅力がある。また、査証の有効期間内であれば、語学学校に通ったり観光したりアルバイトをしたりなど比較的、時間を自由に使うことができるため、計画や見通しを持っているものにとっては理想的なのかもしれない。

次は、環境の変化である。日本での仕事や、生活に疲れ仕事を辞めてワーキング・ホリデーに行く人も少なくない。「ずっと海外で暮らしてみたかった」「なんでもいいから環境を変えたかった」など、理由は様々であるが、海外での生活に憧れを持って、観光をしながら、なおかつお金を稼げるワーキング・ホリデーが人気であると考えられる。

これらのように、ワーキング・ホリデー制度を利用して海外生活をする、というライフ

表 2-1 日本のワーキング・ホリデー制度の歴史

制度開始年月日		協定国
1980年	12月1日	オーストラリア
1985年	7月1日	ニュージーランド
1986年	3月1日	カナダ
1999年	4月1日	大韓民国
2000年	7月15日	フランス
2000年	12月1日	ドイツ
2001年	4月16日	イギリス
2007年	1月1日	アイルランド
2007年	10月1日	デンマーク
2009年	6月1日	台湾（中華民国）
2010年	1月1日	香港
2013年	2月1日	ノルウェー
2015年	2月27日	ポーランド
2015年	3月27日	ポルトガル
2016年	2月24日	スロバキア
2016年	4月14日	オーストリア

出所：外務省、日本ワーキング・ホリデー協会より筆者作成

コースを選択する若者がいる。理由として、留学の要素を第一に持っており、「ワーホリ」が広義の留学として捉えることができ、このことから留学の多様化を読み取ることができる。

### 2-3 海外ファームステイ

国内でもよく耳にするファームステイは、いわゆる農村体験である。ファームに滞在しながら、農業を体験するもので酪農型ファームや果樹園型ファームなどにより動物の世話やフルーツ・野菜などの収穫、ワイナリーでの作業などを体験することができる。

ファームステイには主に2つの種類がある。1つは、ファームを覗いてみたい、体験してみたいという人への体験（観光）型ファームステイである。お金を払って、客としてファームに滞在しながら、動物への給餌や羊の毛刈り、乗馬などアクティビティー体験を中心にしたプログラムである。また、期間としては1泊2日から1週間ほどと短期で家族連れでの参加など、旅行という要素が強い。もう一つは、仕事としてファームに滞在する労働型ファームステイである。ファームに労働力を提供する代わりに、滞在費や食費など無料になるためエクステンジ型ファームステイとも呼ばれ、プログラムによっては1日あたり4～6時間程度の労働をすることになる。これは、生活費の節約をしながら長期滞在をする人向けである。

ファームステイの最大の魅力は大自然のなかで過ごせることである。日本では、仕事や学校など忙しい毎日に追われている者が多い。そんな生活から距離を置いて、時間に追われることなく、ゆったりと過ごすことを目的として参加する者が多い。

さらには、語学の勉強を目的として利用することもできるのである。ファームステイでは、海外でのスローライフを送りながら、語学を学びたいなどの動機で参加するケースが多い。

### 2-4 海外ボランティア

ボランティア留学は、観光や語学留学と違い海外生活をしながら何らかの形で社会に貢献することである。国や地域の選択、利用する団体、期間によって活動は様々である。傾向として、自然保護作業や植林活動などの環境分野や幼稚園や小学校で子どもたちの世話や遊び相手をする教育分野が多くなってきている。その他には、福祉分野や医療分野、歴

図 2-2 NZ でのファームステイの様子



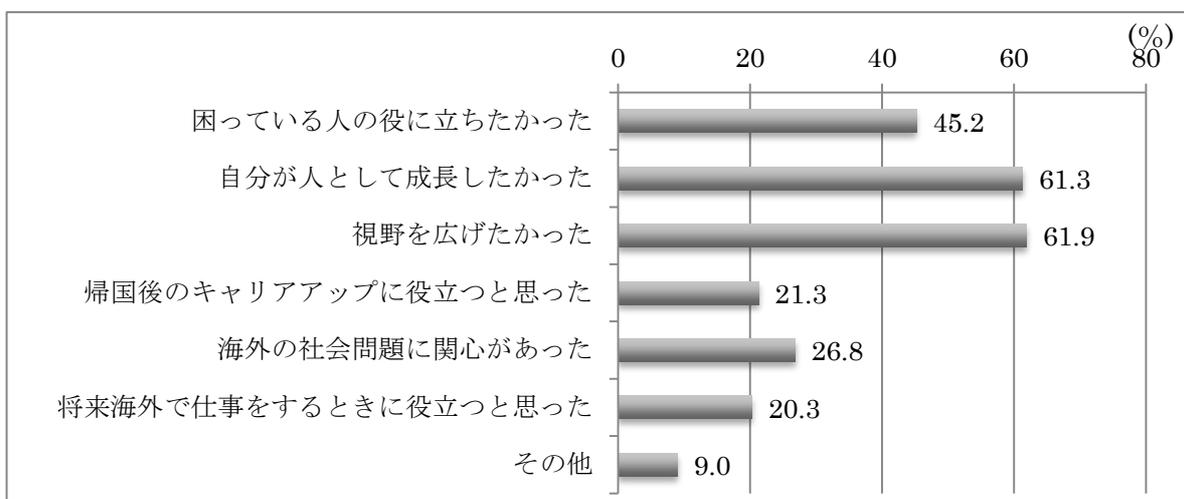
出所：留学くらべ〜る

史的建造物の修復などを行う建築分野など専門的で自分の特技や資格などを生かした活動がある。あくまで自主的な活動であるため、ボランティアを毎日行うというよりは週に何日かなど滞在中の空き時間を利用して手伝いをするという人が多い。

#### 2-4-1 「海外ボランティア」という選択

ここでは、若者がなぜ、ボランティアを選択するのか。また、なぜ海外なのか、について考察していきたい。

図 2-3 海外ボランティアに参加する理由（複数回答）



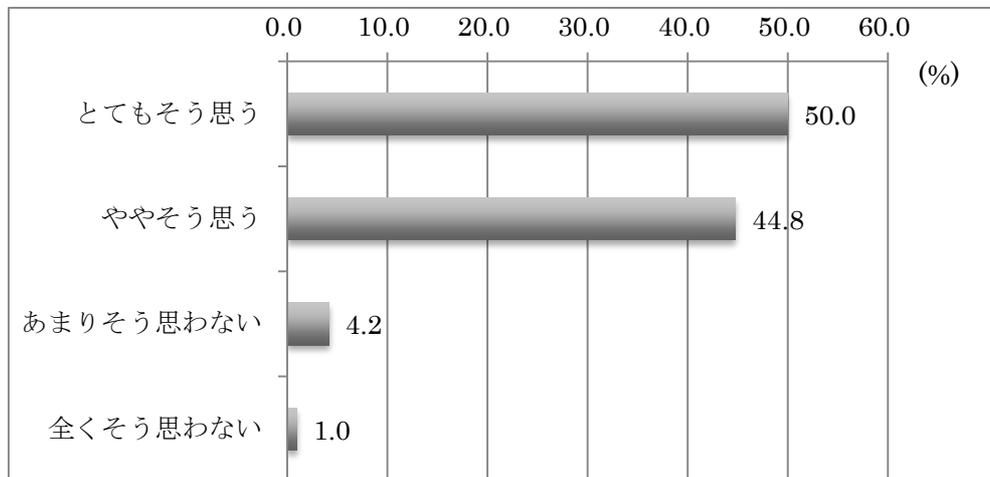
出所：ReceMom

海外ボランティアに参加する理由として最も多かったのは、「視野を広げたかった」との回答であった。海外でのボランティアを経験することで、世界には様々な人々がいるということ、いかに日本が恵まれた国であるかということ、今まで常識であったことが違ったこと、などを実際に自分の目で見て、聞いて、感じることで視野を広げたいと考える若者がいるのである。ついで多かったのは、「自分が人として成長したかった」との回答である。どちらも、海外ボランティアを通して、自分のためにプラスになることを望んで参加する者が多いことがわかる。

自分の成長のためであるという理由が多くを占める中で、「困っている人の役に立ちたかった」との回答も 45.2%であった。現代の若者は、社会貢献の意欲が強いことから、誰かを助けたい、力になりたいと思っている若者が多いことがわかる。では、そこでなぜ日本でなく海外なのか、という意見がある。日本にも困っている人や助けを求める人は多くいる。そのような意見に対して、実際の体験者は「海外に“助けたい人”がいる」と答えている。日本ではなく、海外に助けたい人がいるという理由で海外ボランティアに参加す

るのだという。その選択の際には、少なからず自分の成長をも加味しているとも考えることができる。

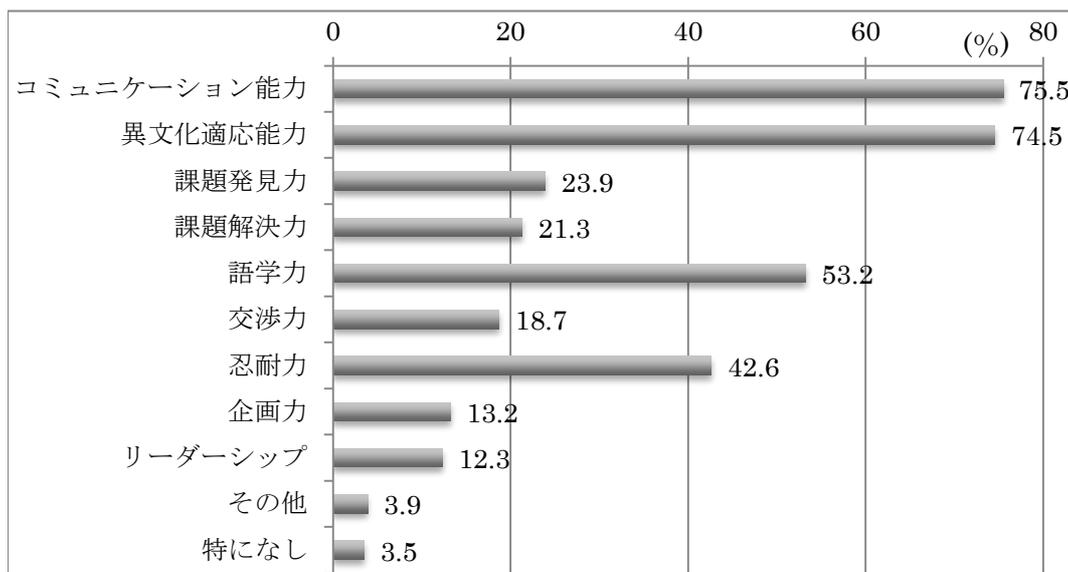
図 2-4 海外ボランティア経験が人間的な成長につながったか（単一回答）



出所：ReceMom

トレンド総研が、1ヶ月以上の海外ボランティア経験のある20～49歳の男女310名を対象に行なったインターネット調査では、海外ボランティア経験者の94.8%が人間的な成長につながったかという問いに「そう思う」と回答している。実際の声として、海外ボランティアが経験者にとって成長につながると考えられる。では、実際にどのように人間的な成長が感じられたのか。

図 2-5 海外ボランティアに参加して身についたと感じる能力（複数回答）



出所：ReceMom

海外ボランティア経験によって参加者が身についたと感じる能力について、「コミュニケーション能力」と「異文化適応能力」との回答が約75%であった。ついで、「語学力」が約半数で、「忍耐力」が40%であった。

データからもわかるように、海外ボランティアは「人を助ける」ということを軸としていながらも、それが自分の成長につながることで、語学力や忍耐力など得るものも大きいと感じることが多いのである。

## 2-5 バックパッカー

バックパッカーとは、低予算で国外を個人旅行する者を指す。名前の由来は、バックパックを背負って移動する者が多いからである。通常の旅行者との違いは、移動手段として公共交通機関を利用すること、ゲストハウスなどの安宿を好んで滞在すること、世間的な休暇よりも長い期間にわたること、観光だけでなく地元の住人やバックパッカー同士との交流を積極的に図ることなどがある。バックパッカーに明確な定義はないが「バックパッカーたちは自身の旅行経験に結び付いた行動原理や意義の多様性を反映して不均質なグループを形成した。バックパッカーたちは、制度化されていない旅行の形式への共通の傾倒を見せ、それがバックパッカーとしての中心的な自己定義となっている」(Adkins/Grant, 2007)。

バックパッカーは、皆同じような格好をしている。共通してバックパックを背負っているというだけでなく、Tシャツ短パンにサンダルなど比較的ラフな服装が多い。持ち運びに便利なだけでなく、着替えや洗濯、現地での調達や処分などの面において優れているからだと考えられる。

### 2-5-1 国内バックパッカーの歴史

国内のバックパッカーの起源は、1960年代後半から1970年代後半の「カニ族」と言われている。横長で甲羅のように大きなバックパックを背負って、電車の中を横向きに歩いていたことから名付けられた「カニ族」は、高度成長の末のモノの消費からライフスタイルの消費への転換期にブームになり、主に北海道を放浪していた。2週間から1ヶ月間程度の期間で、旅先の住民と交流を持ちながら旅をしていた。また、滞在はユースホステルで旅人同士の人間関係も濃厚であった。

図 2-6 カニ族



出所：ブログ「鳥海山」

1970年代後半からは、田高やジャンボジェット機の登場、ドル持ち出し制限の緩和の影響によって日本の若者にとって個人の海外旅行が身近になった。その後、1980年代に格安航空会社が出現しバックパッカーが増加した。また、今では海外旅行のガイドブックの定番になった「地球の歩き方」が創刊されたことにより、海外旅行が身近になった。

1996年、テレビ番組「進め!電波少年」内の「ユーラシア大陸をヒッチハイクで横断する」という企画でお笑いコンビの猿岩石が、台湾からロンドンを目指した。この企画によって、バックパッカーのイメージを一般に広めることになり、アルバイトでお金をためて、長期休暇中に海外旅行をする学生も増加した。

今日では、FacebookなどのSNSの普及に伴い、スマートフォンやパソコン、タブレットなどを持ち歩き駆使しながら旅をする「フラッシュパッカー」と呼ばれるものも出てきた。

### 2-5-2 バックパッカーの心理

バックパッカーの心理としては、これまで暮らしてきた環境と全く異なる世界で、新しい文化に触れたり、新しい人たちと出会ったりといったお金では買うことのできない体験を求めている。バックパッカーが最も重視しているものは「本物の」感覚であり、ツアー旅行のようなパッケージ化されたものではなくリアルな現地を体験することで自己教育の手段としている。このことから、バックパッカーが反観光客であると考えられている。

バックパッカーは、「新たな自分を発見する」ことも旅の目的としている。これは、周囲の他人から見ると全く意味のないことのように見えても、旅をする者自身にとって重要な意味を持っている。バックパッカーには、自分だけの何かを見つけるために旅をしている者も多く、世界中の人に何かを質問して回ったり、笑顔を撮り続けたりして旅をしている。

バックパッカーの聖地として、よくインドを耳にする。女性の一人旅や、インドに行ったら人生観が変わる、自分探しのインド旅行など世界中のバックパッカーを魅了している。

バックパッカーシンドロームという言葉があり、一度バックパッカーを経験すると、再び次の旅に出たくなるという心理状態を指している。それほどまでに、バックパッカーという旅の仕方は若者を魅了し、海外生活へと引き込んでいくのである。

図 2-7 「地球の歩き方」創刊号



出所：新刊 JP

図 2-8 「進め!電波少年」



出所：タビリス

## 2-6 小括

語学学校をはじめ、生活を軸として「経験をする」ということに意味を持ち、目的とする渡航が増えてきている。それは、ワーキング・ホリデーや海外ファームステイ、海外ボランティアなど様々な形で若者を中心に浸透している。海外という未知の世界で、自分が本当にやりたいこと、また自分自身を見つけるため、明確な目標に到達するためなど夢を追求する手段として、またキャリア形成の準備期間として海外志向のライフコースを選択する若者が増加していると考えられる。

日本国内で、時間に追われ複雑な人間関係に悩まされて社会人として仕事をしていくことを嫌い、自分にあった場所を見つけることでスローライフを送ることに魅了され憧れをもつ者も少なくはない。

## 第3章 内向き志向のライフコース

### 3-1 内向き志向の若者

海外志向の若者が増えている一方で、内向き志向と言われる若者も存在する。内向き志向とは、海外での就職や留学、旅行などを望まない者を指す言葉で、国際的な人材の減少などが日本の将来に影響を与えると考えられている。

内向き志向の若者の原因として考えられているのが、日本人の英語力の低さである。海外に行けば必ず必要になってくる英語が出来なければ、取得できる情報量が少なくなかったり、人とのコミュニケーションの機会が減ったりと、様々な障害が出てくる。「日本から出なければ、別に英語が話すことができなくても困らない」と考える者も少なくはない。その結果として、海外留学や海外への就職、旅行などをしづらいつと感じる若者が多いのではないかと考えられる。英語による情報が、キャッチできないことでさらに外の世界への興味が薄れていくということも考えられる。

またI部で記述したように、若者のリスク回避により国内の居心地がよくなり過ぎたことが要因で、内向き志向の若者が出てくるのだと思われる。

#### 3-1-1 パラダイス鎖国

日本のことを指した「パラダイス鎖国」という言葉がある。これは、海部美知著の『パラダイス鎖国 忘れられた大国・日本』によって、島国である日本、平和な環境の中で育った若者が不自由を感じないために、海外に出たがらないことを指したものである。日本は、治安は良く住みやすい、食事はおいしく、おしゃれなモノにあふれ、サービスはよいとすることができる。そんな豊かで、住みやすい「パラダイス」の中で、日本はかつてのような外国への憧れや興味を失い、閉じていく社会「鎖国」へとシフトしているという。

### 3-2 マイルドヤンキー

マイルドヤンキーとは、2014年にマーケティング・アナリストの原田曜平が定義した概念である。地元にも根ざし、同年代の友人や家族との仲間意識を基盤とした生活をベースとする若者を指す。

ひと昔前まで、ヤンキーといえば暴力的でバイクを改造しヘルメットも被らず街中を暴走しているというイメージが強かった。一方で、外見や容姿にはヤンキー性の残るものの中身がマイルドになった若者が増え、「マイルドになった現代版ヤンキー」という意味合いで呼ばれている。若者の約15%がマイルドヤンキーに該当していると言われている。

### 3-2-1 マイルドヤンキーの特徴

一般的に、マイルドヤンキーは大都市よりも郊外や地方に多く見られるという。また、仲間同士で集まのは、大型のショッピングモールやカラオケ店、ボーリング場などの賑やかな場所を好む傾向がある。深夜の時間帯にドン・キホーテに高確率でいるという話もある。

マイルドヤンキーの最も大きな特徴としては、地元志向だということである。職場も含めて、自宅から半径 5km 圏内でほとんどの生活をしていたり、小・中学校時代からの友人関係が続いていたり、身近な環境や人々を愛している傾向にある。

マイルドヤンキーは、低学歴で低収入が多いとされている。また IT への関心やスキルが低い傾向がある。しかし、実家にパラサイトしている割合が高く同程度の所得者に比べると、自由に使えるお金が多く、消費意欲が高いというのも特徴である。原田はマイルドヤンキーを「消費の主役になりつつある新保守層」としている。不況の中で、消費意欲が低い同世代の若者に比べて、喫煙率や飲酒率が高いだけでなく、車やバイク、ブランド品なども購入も惜しまない傾向にある。

マイルドヤンキーの他の特徴として、「できちゃった結婚」の割合が高く、子どもにキラキラネームをつける、ミニバンに乗っている、男性は EXILE に憧れ、女性は安室奈美恵に憧れているなどの傾向がある。

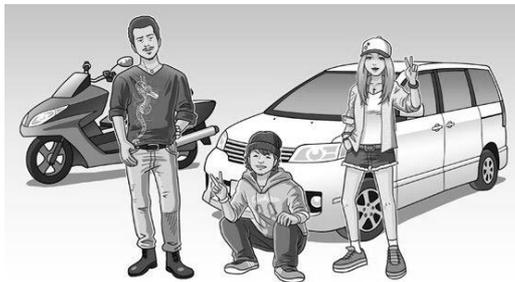
『マイルドヤンキー』は学歴も年収も低めで、しかも出世等、社会階層の階段を登ろうという野心に乏しい。現状肯定的（社会に不満がないわけではない）で、社会改革を先導したり支持したりという意欲にも乏しい。だが、地元志向で、結婚しても両親の近くに住み、夫婦共働きということになると、ある程度の世帯収入と可処分所得はある」（風観羽、2014）。

彼らは、都市部の競争社会を嫌い地元で仲間や家族との絆を大切に生きていく。社会への不満を持っており、そこから距離をおく姿勢は上述したような、バックパッカーやなど海外志向の若者と共通しているのではないだろうか。地元志向と海外志向とで対極にいるような両者は、実は割と近い存在なのではないかと考える。

### 3-3 「フリーター」という選択

フリーターとは、1980 年代からのバブル時代を背景に、時間を自由にとれる「フリー」と、アルバイトをする人「アルバイト」を掛け合わせて生まれた造語である。明確な定義

図 3-1 マイルドヤンキーのイメージ



出所：寄り道 Express

はないが、内閣府の『国民生活白書』（2003）によると、「15～34歳の若年（ただし、学生と主婦を除く）のうち、パート・アルバイト（派遣等を含む）及び働く意思のある無職の人」としている。また、厚生労働省の『労働経済白書』（2003）では「年齢15～34歳、卒業生、女性については未婚者に限定し、さらに（1）現在就業している者については勤め先における呼称が「アルバイト」又は「パート」である雇用者で、（2）現在無業の者については家事も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事我希望する者」としている。

以下の表と図は、日本労働研究機構の『フリーターの意義と実態』におけるフリーターの類型とその割合を示したものである。

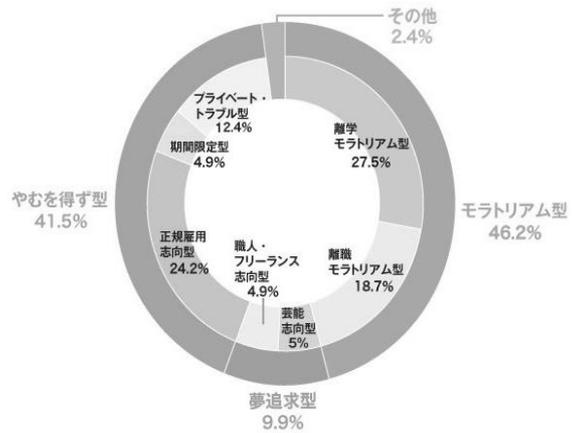
表 3-1 フリーターの類型

類型	概要
モラトリアム型	
離学モラトリアム型	職業や将来に対する見通しを持たずに教育機関を中退・修了し、フリーターとなったタイプである。
離職モラトリアム型	離職時に当初の見通しがはっきりしないままフリーターとなったタイプである。労働条件や人間関係による離職理由が多く、離職時に正規雇用は強く志向していない。
夢追求型	
芸能志向型	バンドや演劇、俳優など芸能関係をしようしてフリーターとなったタイプである。練習やオーディション応募、養成機関所属な関連活動を行なっている。
職人・フリーランス型	ケーキ職人やバーテンダー、脚本家など自分の技能・技術で身を立てる職業を志向してフリーターとなったタイプである。関連するアルバイト等を行なっている。
やむを得ず型	
正規雇用志向型	正規雇用を志向しつつフリーターとなったタイプである。公務員などの特定の職業への参入機会を待っている者、就職活動に失敗したものなどが含まれる。
期間限定型	学費稼ぎのため、または次の入学・就職時期までといった期間限定の見通しを持ってフリーターとなったタイプである。ワーキング・ホリデーのための費用稼ぎも含まれる。
プライベート・トラブル型	本人や家族の病気、事業の倒産、異性関係などのトラブルが契機となってフリーターとなったタイプである。

出所：『フリーターの意識と実態』より筆者作成

フリーターの類型で最も多いのは離学モラトリアム型である。社会にでることへの不安からフリーターとなることが多い。次いで、正規雇用志向型が多い。厳しい経済状況の中で、若者の失業率は高い。さらに、不況下にも関わらず若者の失業は自発的離職が多い。明確な理由はわかっていないが、いわゆる「ブラック企業」の存在、若者自身の意識の問題ではないかと考える。こういったことが、「ゆとり世代」という烙印を押される原因の一つとも考えることができる。

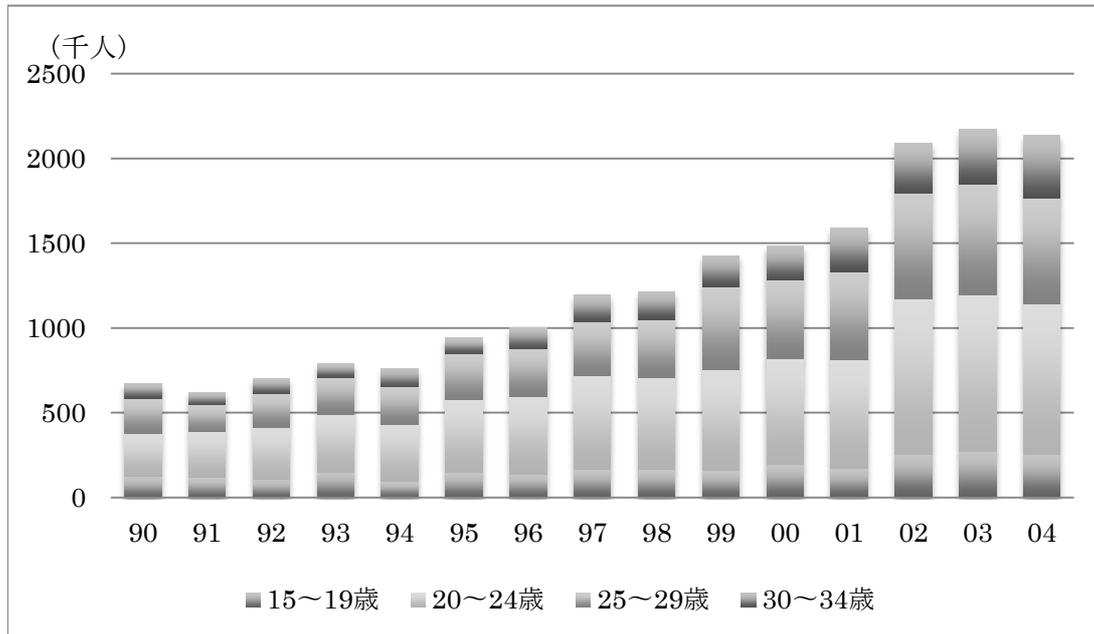
図 3-2 フリーターの類型ごとの割合



『フリーターの意識と実態』(2016)

出所：an report

図 3-3 年齢別フリーター数の推移



出所：総務省「労働力調査」

フリーターの全体数は増加傾向にある。それは、就職難や労働環境の悪化だけでなく「フリーター」の意識やそれに対する目に変化しているからではないかと考える。やむを得ずフリーターになった者もそうでない者も、「やりたいこと」への強いこだわりを持っていることが多い。フリーターにとって好きなことができれば、自分の本当にやりたいことがで

できればフリーターと正社員の区別はそこにはない。また、フリーターを経験することによって、コミュニケーション能力や社会をうまくわたる術などソーシャル・スキルの向上を感じた者も多い。フリーターにとって、その期間は自由に様々な体験をすることによって自分を見つめ直し、やりたいことを見つけたりやりたいことのために準備したりするためのいわば「充電期間」なのである。そういった意味では、フリーターは一つの選択肢とも捉えることができる。

### 3-4 小括

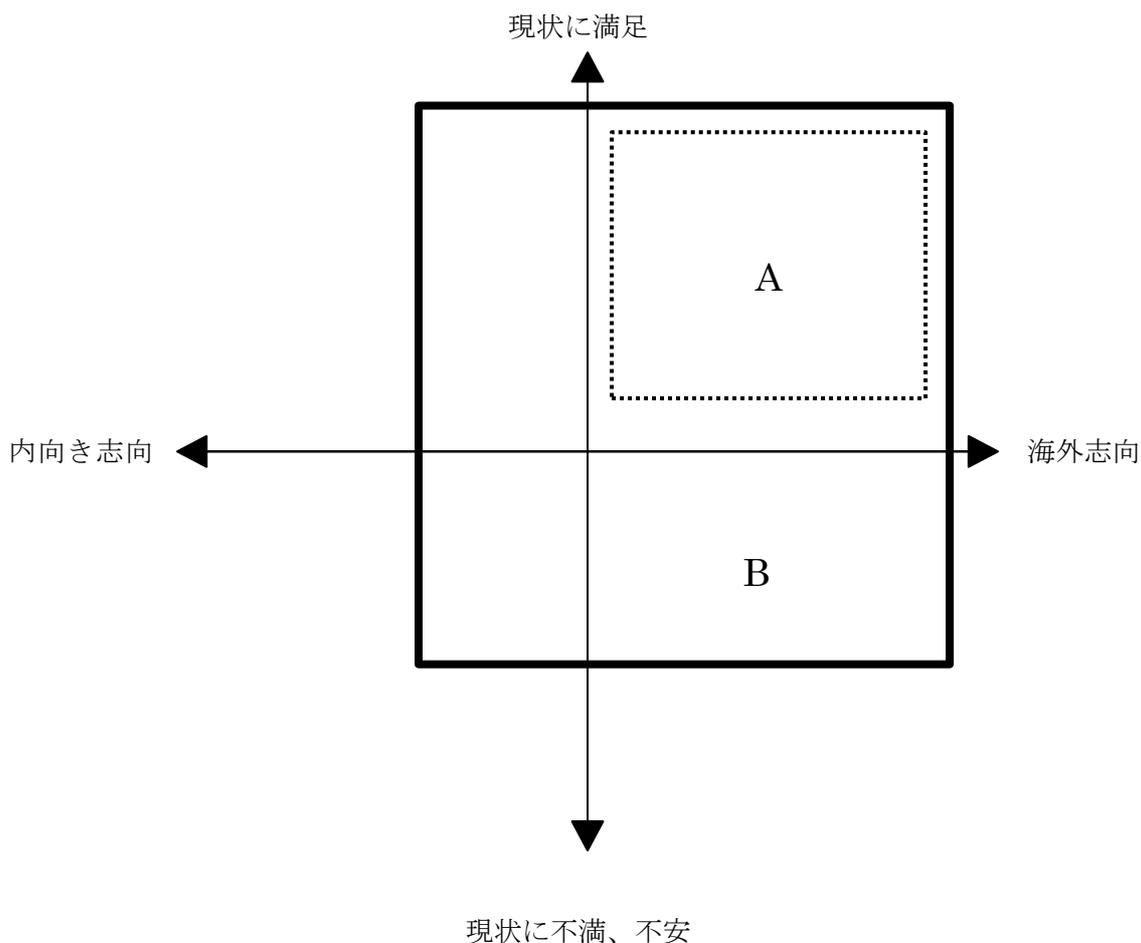
現代の若者には、マイルドヤンキーのように周囲からすると一見、劣悪のような環境にありながらも自分たちのコミュニティの中でキャリアアップに固執せず早くから結婚や出産を経て家庭をもつことを望む者も存在する。フリーターもまたこの不況の中で、増え続けてはいるものの自分が本当にやりたいことを見つけるため、明確な目標に到達するためなど夢を追求する手段として、またキャリア形成の準備期間としてその形を変えてきているのではないかと思われる。

## 第4章 若者にとっての「留学」

### 4-1 「留学」の在り方

前章までは、現代の留学が多様化していることを述べてきた。そこで、現代の留学が若者にとってどのような在り方であるのかについて考察していきたい。

図4-1 留学する層の分布



第1章で用いた、分布図に当てはめると留学をAとBに分けることができる。

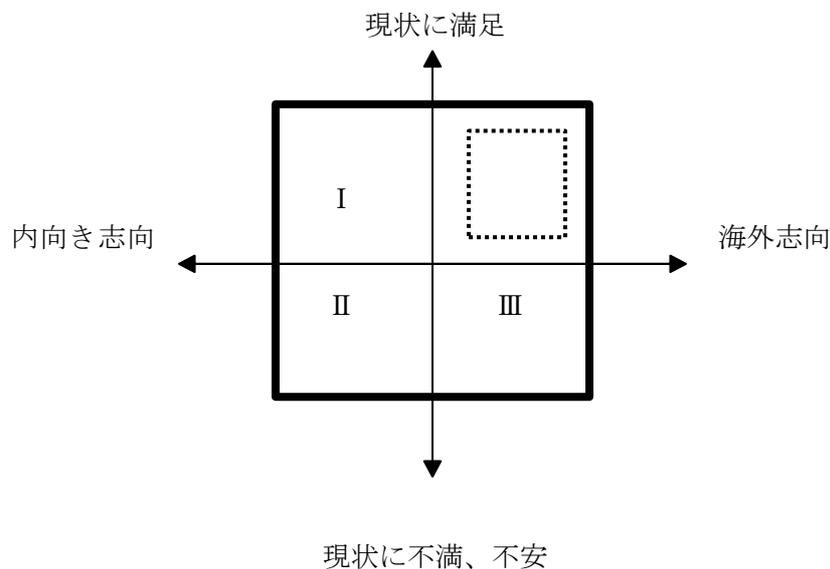
Aは、海外志向型で現状に満足しているグループである。これらは、一般的に留学を行うグループであると捉えられることが多い。留学をする層は、比較的高所得者であり現状の生活に満足していることが考えられる。その上で、自らの語学力の向上やスキルアップを目的としてさらなる高みへと目指す若者であると考えられる。また、海外留学をする若者は海外志向であると考えられるのはふつうである。

一方で、私が語学留学の経験を通して得られた留學生の分布がBである。Bは広義の留学であり、長期間で見た場合の分布である。私は、現在の留学が海外志向で現状満足寄りではあるが、内向き志向で現状に不満、不安のグループも存在しているのだと考える。

## 4-2 留学の類型化と事例

ここでは、広義の留学を類型化して分析していく。また、私の留学経験で出会った人々の事例を類型化した象限ごとにみていく。

図 4-2 広義での留学の類型



### I : 内向き志向型・現状満足

この象限は、海外留学を通して将来的な内向き志向が当てはまる。ここでの内向き志向はポジティブな意味であり、海外留学という経験を踏まえて自身のスキルアップだけでなく、海外を知ることで自国の良さを改めて気づき、再認識することによって母国での生活を選択する場合である。

私が、留学で最も仲良くなった日本人の一人に A さんがいる。A さんは、日本国内で、看護師として約 10 年間勤務していた。彼は、海外旅行などにとっても興味があり、長期休暇などには頻繁に旅行に出かけていた。そんな中で、語学力向上の目的、観光の延長として留学を選択した。大きな病院で勤務しており現状の生活には十分満足していたが、退職し半年間の語学留学を決め、帰国後も日本でまた看護師として勤務するという。留学を通して、グローバルな人間関係を形成したり、人生をより豊かにしたりという思いでのライフコースであった。

### II : 内向き志向型・現状不満、不安

この象限は、不満のある現状に対して海外留学を通して何らかのアクションを起こそうと考える層である。将来的な生活は国内を考えているが、海外生活をスキルアップ等の準備期間としてしていると考えられる。このグループは、「留年隠し」なども当てはまるのではないかと考えられる。留年などを理由に、履歴書に空白が生まれないために仕方なく留学

を選択する者がいると思われる。

私が留学で出会った B さんがいる。彼女は、高校卒業後、Web デザイナーとして約 6 年間勤務していた。現在の仕事や生活にあまり満足はしておらず、以前から海外留学に興味があったことから、ワーキング・ホリデービザを取得し渡航した。3 ヶ月間、語学学校に通った後、観光都市にてホテルのアルバイトをしながら過ごした。帰国後は、自分の経験を生かし、好きなことに触れていられるという理由から海外旅行の代理店に勤務している。

### Ⅲ：海外志向型・現状不満、不安

この象限は、日本国内の制度や環境に不満を持っていることを理由に海外志向である者が当てはまる。日本での生活や仕事に対して不満や不安を持っており、海外での生活を望む者がいる。第 2 章で取り上げた、バックパッカーやワーキング・ホリデーなどが広義の留学であるとすれば、ここに当てはまる。

私が留学中に出会った同い年で大学生の C さんがいる。国内の大学に 3 年間在籍した後、ワーキング・ホリデービザを取得して渡航した。留学前は、総合政策学部で学んでいたが就職活動を目前にした時に、海外留学を選択したという。彼は、2 ヶ月間語学学校に通った後、バンクーバー市内の雑貨屋でアルバイトをしていた。帰国後は、他大学へ編入する予定であり国際的な学問を勉強したいと語っていた。

### 4-3 留学の「成功」

「留学で失敗する」などということをよく耳にするが、では留学の「成功」とは何か。TOEIC の点数が目標に達したら成功か。外国人の友人ができたら成功か。何かの資格を取得したら成功か。実際には、留学の成功は客観的意見であって明確な定義はないのではないだろうか。二人の留学生が同じ成果を挙げたとして、一人は留学が成功であったと感じても、もう一人は失敗だったと感じるのかもしれない。つまり、「留学の成功」の定義は、それぞれ留学をする者の中にあるということである。

ここでは、留学経験者から語学留学が成功であったと感じた者の共通点をまとめていきたい。

#### (1)モチベーション

語学学習においては、継続が最も重要である。そのために、習慣化するための動機付けが重要であり、モチベーションを維持するためには、まず目的の明確化が必要である。ゴールを設定することによって、人は頑張れるという本能を利用することが良いという。次に、行動の習慣化である。短い時間でも毎日やるなど機会を強制的でも設けることによってモチベーションを維持することが大切である。さらには、楽しさを追求することが大切

である。淡々とした単語記憶や長文読解などの「苦行」はなるべく減らし、学習以外に楽しさを見出すことがとても大切であるという。

## (2) コミュニケーション

外国人と積極的に話す機会を設けることが語学留学においては、最も重要であると考えられている。実際、慣れない異国の地で不安や寂しさから日本人やエージェントなどに頼りすぎてしまい、気づけば生活のほとんどを日本語で過ごしていた、などということが起こり得る。そこで、自分から能動的に日本語が話せない人との関わる機会を作っていくことによって強制的に、話すことがとても重要である。

## (3) シチュエーション

シチュエーションは、とにかく多様な場面において言語を使用する経験を持つことである。例えば、学校との手続きやホストファミリーとの対話、買い物や旅行などリアルな場面での言語の使用がとても重要である。

以上の、3点が海外留学、特に語学留学においては重要である点であると考えられる。

しかし、私は、留学がどのような動機でも、どのような手段であっても良いと考える。「留学」という経験がその人に何らかの影響を与えることは間違いない。それは、良い影響か悪い影響かは様々である。しかし、留学を望む者全てが実現できる社会であるべきだと考える。

## 4-4 今後の留学のトレンド

インターネットの普及とともに、大量の留学エージェントなどから情報が得られ多様化する留学など、現在の「留学のニーズ」も日々変化している。

英語の必然性や重要性は今後も高まり、自ずと英語圏への日本人海外留学生は増加することが予想できる。アメリカ一択であった留学先は、今後も多様化していくと予想できる。上述した通り、ここ最近ではフィリピン留学が高まっている。また、比較的費用が安く留学できるアイルランドなどの欧米諸国や、マレーシア、シンガポールなどのアジアの英語公用諸国への留学はさらなる増加を見せると考えられる。

英語圏以外での海外留学では、次に中国語留学が考えられる。実際、中国への海外留学生数は増加しており、日本からも増加傾向にある。そこで、台湾やシンガポールなどへの中国語留学が増加するのではないかと予想できる。

## 第5章 まとめ

第Ⅱ部では、現代の若者を取り巻く現状と若者のライフコースについて考察してきた。

第1章では、現在、若者を取り巻く社会について取り上げた。少子高齢化社会や長期間にわたって低迷する日本経済の中で、さまよい続ける若者について触れた。また、現代の若者の特徴として、若者の仕事観や恋愛観についても取り上げた。現代の若者は、バブル期とは異なり、高級車やブランド品などへのこだわりは薄く、経済的に豊かな生活よりも自らが楽しい生活をしたいたいの考えの者が多いことがわかった。また、社会への貢献意欲も高いことがわかった。恋愛においては、SNSなどによる大量の情報や経済的な問題から、恋愛が「必需品」から「嗜好品」へと変化していることもわかった。全体的には、現状に満足している若者が多いこともわかったが、それらは明るい未来を見られないからという消極的な理由によるものが多かった。最後に、これらの若者の環境において、若者がどのようなライフコースを選択するのか、また分布図を用いて考察した。

第2章では、前章で挙げた若者を取り巻く社会の中で、海外志向の若者が選択しているライフコースに関して取り上げた。ワーキング・ホリデーという若者にだけ与えられた権利を利用して、自らのスキルアップや人生をより豊かにするための手段がわかった。また、海外ファームステイや海外ボランティアなど、「経験を買う」留学について取り上げてきた。また、バックパッカーという自分だけの何かを探しに行くといった若者についても取り上げた。

第3章では、海外志向に対して内向き志向の若者のライフコースについて取り上げた。経済発展後、身の回りに溢れるモノと安全の中で、居心地が良すぎるあまり外の世界に飛び出すことのできない若者が多いことがわかった。究極の内向き志向として、マイルドヤンキーを取り上げた。自分が生まれた場所で、仕事や結婚、子育てをして行く彼らの特徴などを紹介した。次に、フリーターについて触れた。人生の挫折組などと呼ばれていた彼らであるが、現在ではフリーターという選択が彼らの人生においてとても重要であることがわかった。自己実現やスキルアップのために、あえて自分をフリーターという立場に身を置くことは決して、挫折や落ちこぼれなどという言葉では表せないと感じた。

第4章では、上述の様々な若者のライフコースを踏まえた上で、若者にとって留学がどのようなものなのか取り上げた。留学を若者の考えを元に類型化して、事例を当てはめることで、今日の留学について見ていった。多様化し、日々変化していく留学は今後、どのようなあるべきなのか。

文部科学省は、意欲と能力ある全ての日本の若者が、海外留学に自ら一步を踏み出す気運を醸成することを目的として、2013年に留学促進キャンペーンとして「トビタテ！留学

JAPAN」を開始した。政府だけでなく、社会全体で取り組むことによって、官民協働で「グローバル人材育成コミュニティ」を形成することで、将来世界で活躍できるグローバル人材の育成を目指している。また、留学の「成功」と呼ばれるものを紹介していった。留学生自身の中に、様々な「成功」があることがわかった。最後に、今後の留学のトレンドについて考察を行った。

## おわりに

数十年後、私を含めて、現在の若者はどのように変わっていくのであろうか。「ゆとり世代」の若者は、年をとっても呼ばれ続けるのであろうか。明るい未来を想像できない若者が、未来を切り拓いて行くことができるか否かは私たち自身にかかっていると考えます。これから、ますます便利に進化し続ける社会の中で、若者の生活やライフコースはさらに多様化してくるのではないだろうか。また、長い年月を経て、留学は大きく変わってきた。アメリカ滞りの学位取得の留学から大きな転換を遂げている。周りが無駄であったと感じるようなものでも、海外に行くことで、若者が何かを知ること、感じることであればそこには大きな意味があるのではないだろうか。海外に行きたいと思った若者が、全て実現されるような社会になれば良いと思う。また、本論文がこれから留学を考える方や海外に少しでも興味のある方にとって少しでも為になればと思う。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、ご協力してくださった皆様に心より感謝申し上げます。

本論文では、私自身による見解、解釈等が含まれているため、若干の意見、ニュアンスの違いがあることをご了承いただければと思います。

そして、本論文作成の当初からご指導頂きました角一典先生には、厚く御礼申し上げます。いつも的確なご指導のおかげで、視野が広がりさらに研究を深めることができ、本論文の完成に至ることができました。本当にありがとうございました。

## 参考文献

- ・ Barbara Adkins／Eryn Grant, 2007, Backpackers as a Community of Strangers: The Interaction Order of an Online Backpacker Notice Board, *Qualitative Sociology Review* 3 (2):188-201.
- ・ J.J.Rousseau, 1962, *EMILE, OU DE L'EDUCATION*, (=永杉喜輔、宮本文好、押村襄, 1982, 『エミール (全訳) —西洋の教育思想—』玉川大学出版部).
- ・ 秋葉英則, 2005, 『「エミール」を読みとく』清風堂書店.
- ・ 梅根悟, 1971, 『ルソー「エミール」入門』明治図書出版.
- ・ 海外留学協議会, 2015, 『留学指導要領 —グローバル化時代の新たな留学指導書』学事出版.
- ・ 小林哲也, 1995, 『国際化と教育 —日本の教育の国際化を考える—』放送大学教育振興会.
- ・ 栄陽子, 2007, 『留学で人生を棒に振る日本人 —“英語コンプレックス”が生み出す悲劇』扶桑社
- ・ 仲島陽一, 2011, 『ルソーの留学論』, 東洋大学国際地域学部編, 『国際地域学研究』pp.99-108.
- ・ 若者の就業行動研究会 (高梨昌／耳塚寛明／三野誠登／吉田修／中島史明／小杉礼子／本田由紀／下村英雄／上西充子／堀有喜衣), 2000, 『フリーターの意識と実態 —97人へのヒアリング結果より— (調査研究報告書)』日本労働研究機構.

## 参考 HP

- ・ All About HP : <https://allabout.co.jp/gm/gt/1237/>
- ・ an report HP : [http://weban.jp/contents/an\\_report/repo\\_cont/trend/20160615.html](http://weban.jp/contents/an_report/repo_cont/trend/20160615.html)
- ・ Don Pancho HP : [http://www.bell.jp/pancho/k\\_diary-13/2014\\_12\\_05.htm](http://www.bell.jp/pancho/k_diary-13/2014_12_05.htm)
- ・ Global ACE HP : <http://www.global-ace.jp/research/>
- ・ アメリカ経済 Blog : <http://uskeizai.com/article/256563932.html>
- ・ 一般社団法人日本ワーキング・ホリデー協会 HP : <http://www.jawhm.or.jp>
- ・ ウェブマガジン「留学交流」 : [http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/\\_ics](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/_ics)
- ・ 映画「何者」公式サイト : <http://nanimono-movie.com>
- ・ 俺のセブ島留学 HP : <http://ceburyugaku.jp/39278/>
- ・ 外務省 HP : [http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/visa/working\\_h.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/visa/working_h.html)
- ・ ガベージニュース : <http://www.garbagenews.net/archives/2039329.html>

- ・グローバル人材育成委員会報告書 [http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san\\_gaku\\_ps/2010globalhoukokusho.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf)
- ・公文書に見る岩倉使節団 : <https://www.jacar.go.jp/iwakura/sisetudan/main.html>
- ・ココア留学 HP : <http://55a.info>
- ・地球の歩き方 成功する留学 HP : <http://www.studyabroad.co.jp/homestay/farm.html>
- ・鳥海山 楽遊原日記 : <http://blogs.yahoo.co.jp/rcugen/49863718.html>
- ・日本経済新聞 : <http://style.nikkei.com/article/DGXBZO37206690S1A211C1000000?c>
- ・日本留学総合情報 HP : <http://www.studyjapan.go.jp/jp/toj/toj0302j.html>
- ・ニュージーランド留学情報センター : <http://www.ryugaku-joho-centre.co.nz/farm.html>
- ・バックパッカーはこうして生まれた : <https://matome.naver.jp/odai/2136109241564616>
- ・ブログ「あいむあらいぶ」 : <http://blog.imalive7799.com/entry/Nanimono-201610>
- ・ベネッセ教育開発研究センター : [http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku\\_jittai/2012/hon/pdf/data\\_16.pdf](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/hon/pdf/data_16.pdf)
- ・マイナビ HP : <https://gakumado.mynavi.jp/gmd/articles/42057>
- ・『マイルドヤンキー』の楽観と悲鳴 : [http://www.huffingtonpost.jp/seaskywind/mild-yank ee\\_b\\_5020131.html](http://www.huffingtonpost.jp/seaskywind/mild-yank ee_b_5020131.html)
- ・学びの場.com : <https://www.manabinoba.com/agnes/19550.html>
- ・文部科学省 HP : [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/06032818.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/06032818.htm)
- ・文科省『留学生 30 万人計画』の骨子」とりまとめた考え方に基づく具体的方策の検討 : [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249709.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249709.htm)
- ・ユースアドバイザー養成プログラム : [http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/h19-2/html/3\\_1\\_5.html](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/h19-2/html/3_1_5.html)
- ・洋画・洋楽の中の変な日本・がんばる日本 HP : <http://www.yunioshi.com/sitemap.html>
- ・ラストリゾート HP : <https://www.lastresort.co.jp/sp/data/>
- ・ラバQ HP : <http://labaq.com/archives/51835891.html>
- ・留学ジャーナル HP : <http://www.ryugaku.co.jp/object/>
- ・留学ソムリエ : <http://www.ryugakusommelier.com/single-post/2016/06/27/study-abroad-hannel=DF061020161183&style=1>
- ・留コミ！アメリカ格安語学留学サイト : <http://ryugaku-kuchikomi.com/Files/afieldfile/2015/11/19/yokoikeda.pdf>
- ・鹿鳴館の貴婦人 HP : <http://mitiko02.k-free.net/roku1/roku1.htm>